クラシック巡礼 ８

チャイコフスキーの森

サイト掲載： www.i-s-m-kk.co.jp/

２０１９年 １０月１９日

別当　勉

〈betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp〉

参 考 楽 曲

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 リヒテル/カラヤン	https://www.youtube.com/watch?v=MB1pt3pCC0c
バレエ音楽「白鳥の湖」第2幕「情景」 アンセルメ	https://www.youtube.com/watch?v=cnF-IXtlIhM
交響曲第4番ヘ短調 第1楽章 カラヤン;1966	https://www.youtube.com/watch?v=_Y3GM5x1-6o
弦楽四重奏曲第1番 第2楽章 Andante Cantabile	https://www.youtube.com/watch?v=sLDeQJ0ouS8
ヴァイオリン協奏曲ニ長調 第1楽章	https://www.youtube.com/watch?v=yHhwoMFN7kQ
交響曲第5番ホ短調 第2楽章 カラヤン;1973	https://www.youtube.com/watch?v=_IlaXRWCdZQ
バレエ音楽「眠れる森の美女」 第1幕パ・ダクシオン	https://www.youtube.com/watch?v=RLDGTA0_Sh8
バレエ音楽「くるみ割り人形」 第2幕パ・ド・ドゥ	https://www.youtube.com/watch?v=oUEJx2Cl9fo
交響曲第6番ロ短調 第1楽章 ピエール・モントゥー	https://www.youtube.com/watch?v=8VhheDveo0g

プロローグ

チャイコフスキーの森

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは、１９世紀後半に、末期的ロマノフ王朝時代のロシア帝国で育(はぐく)まれ、活躍したことは、誰でも知っている。彼の甘美な旋律も一つや二つは誰でも聴いている。現代においては、ピョートルの華麗な音楽に対して、大衆の人気度はダントツでもある。彼のファンによってはベートーヴェン、モーツァルトなぞ眼にも入らない。

さりながら、フリークとかオタクともいうべき病的マニアは多くない。あまりにもピョートルの名作たちがポピュラーすぎるから、かえって神秘性・秘境性が失われ、フリークらが跋扈(ばっこ)しないほどの楽興公園になってしまっている。つまり、大人気とはフリークらを敬遠させる抗体性を秘めているのだ。極めて興味深い現象ではないだろうか。

たとえば、「私はチャイコフスキーの《悲愴》が一番好きだ」と言ったとたんに、クラシック・マニアから白い眼で見られる。「その程度？！」というわけだ。とにかく評価されない。

ところが、

「交響曲第６番の第１楽章第２主題がたまらないね。あのヴァイオリンにミュートはめて出すユニゾンの香(かぐわ)しさにはうっとりする。これは、あの《くるみ割り人形》のパ・ド・ドゥのテーマの発展形態なんだって。」

と付け加えたら、それまで白眼視していたマニアらは、顔面が固まるどころか反応できないこと間違いない。一般的なファンにすれば、そんなことに拘る必要もないと言うけれど。故に、ポピュラーなのである。

マニアとフリークの違いを論じるにも、適当な事例ではないだろうか。

でも、私自身はマニアでもフリークでもないと思っている。ただ巡礼している旅人なのである。昔々、トコトコとロシアの広大なチャイコフスキーの森を歩いて聴いてきた、繊細かつ豪快な作曲家の作品を巡っているだけであるが、耳は肥えている。特に、オーボエ、クラリネットやファゴットなどの木管楽器は随所に現われ、彼の甘美な名旋律を歌い上げていることに陶酔してきた。

ピョートルについては、いきなり何も準備しなくとも幾らでもフリーハンドで書いて話せる気が私はする。その意味では、ピョートルの作品には若い時に、京都の千枚漬けのごとく浸(ひた)ってきた独りよがりな自負も消えていない。

このため、思い入れはかなり狷介(けんかい)たる（頑迷たる）ものはあろうが、その分、ピョートルの特徴というか急所に迫ることができるかどうかとなる。

という重い課題が私にのしかかっている。

生立ち

１８４０年、ピョートル・チャイコフスキー（1840-1893）は、現在、ロシア連邦に属するウドムルト共和国のヴォトキンスクで、チャイコフスキー家の次男として生まれた。ヴォトキンスキの町は、モスクワから東へ約７００キロ離れ、カマ川沿いに多くあった製鉄場を統轄する鉱山町であった。

チャイコフスキー家はもともと貧しいコサックの出自であった。医師であった祖父が長年の努力と研鑽を重ねた結果によって、貴族に叙せられた家系である。

幼少期のピョートル（左端）
https://ameblo.jp/tokospiano/entry-12359003376.html

ピョートルの父イリヤー（1795-1880）は、この地方の製鉄場の監督官という職務にいた。この父はフルートをたしなみ、文化的な家庭を築いていた。

ピョートルの母アレクサンドリアは、父にとって二度目の妻であった。彼女の家系はフランスの侯爵の末裔で、本来はプロテスタント教徒であった。アレクサンドリアの先祖は、フランスからロシアに逃れ、移住して来た家系であった。彼女は豊かな教養とやさしさをもち、音楽についても歌やピアノの素養を身につけていた。

鉱山技師の父イリヤーは、１８３７年、４２歳の時にヴォトキンスクに鉱山長（官位は陸軍中佐）として、妻アレクサンドリアを連れて移った。ヴォトキンスクで、長男ニコライ、ピョートル、妹のアレクサンドラ、三男イッポリートと続いて４人が生まれる。この幸せな家にはこの親子だけでなく、何人かの親戚の人たちや使用人たちが住んでいた大世帯の家庭であった。

１８４４年、母アレクサンドリアは６歳の長男ニコライと従姉リディアのために、家庭教師として若いフランス人の娘ファンニ･デュルバッハ（1822-95）をサンクトペテルブルクで見つけて来た。彼女がこの僻地に住む家族に加わった。彼女は豊かな教養とやさしく厳しい教育態度は、子供たちにもこの家族にもよく溶け込んだ。彼女は、ピョートルの幼年時代（４歳から８歳まで）の貴重なデータを、伝えてくれた人でもある。家庭教師をやめた後も彼女は、ピョートルと文通を続けた。

生誕地：ヴォトキンスクの位置

家庭教師ファンニが来た時、ピョートルは４歳半だった。先ずはニコライとリディアを教えるための先生であったが、ピョートルも一緒に学んだ。幼少のピョートルはすべて同じように勉強することを望み、６歳でフランス語とドイツ語を完全に読むことができた。兄と姉をさておいて、ピョートルはなぜかこの家庭教師の心を捉えた。彼の感受性や個性が気に入られた。彼女はピョートルの音楽的な才能に関しては無関心で、彼の文学的才能には一目おいている。また傷つきやすい性質を見抜いて、“ガラスのような子供”とも称した。

ピョートルは５歳の頃には、ピアノをいじり始めた。家にあった当時の自動演奏装置：**オルケストリオン**の奏でるモーツァルト、ロッシーニ、ベッリーニ、ドニゼッティの音楽に熱中し、その旋律をすぐピアノで弾いたほど。

オルケストリオン

自動演奏楽器

（右）自動パイプオルガン　コテージ・オルケストリオン
ウェルテ・スタイル３［ドイツ連邦共和国］
製作者：ウェルテ社　製作年：1900年頃　パイプ数：154本
https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_D00005.html

母は、ついにピアノの先生として農奴出身のマリア・マルコヴァナ・パリチコヴァを招くことになった。しかし、この師弟関係は１年足らずで終

る。さらに家庭教師ファンニとも別れなければならなくなった。

すなわち、１８４８年、父イリヤーはヴォトキンスクの鉱山長の地位を失い、チャイコフスキー一家は**サンクトペテルブルク**に移ったからである。サンクトペテルブルクは母の生まれ故郷で、父が教育を受け成人した所で親戚も多かった。当時、ロシア帝国の首都であったサンクトペテルブルクは、ヴォトキンスクとは何もかも違っていた。ピョートルはここでフィリポフという有能なピアノの先生につき、めざましい進歩を見せ始めた。

現在のサンクトペテルブルク 市内中心部

https://www.getyourguide.jp/st-petersburg-l43/st-petersburg-private-4-hour-sightseeing-tour-t55952/

こうした時期に偶然にも１８４９年初めに、父は、アラパエフスクの工場管理人の職にありつくことができた。半年あまりのサンクトペテルブルクでの都会生活から解放されると、再びチャイコフスキー家に活気が戻ってきた。父は職を得、本来、田舎育ちの子供たちにはより好ましい地であった。兄ニコライは鉱山学校入学準備のためにグロズドフの寄宿舎学校へ入れられたが、他は再びウラル地方へ戻ったのである。今回のアラパエフスクは、ヴォトキンスクより３００キロもウラル山脈に入った田舎であった。両親はアナスターシャ･ペトローヴァを、１８４９年に家庭教師にした。法律学校に入れるためであった。１８５０年、双子の弟たち**アナトーリイ**と**モデスト**が生まれた。この二人はピョートルの最も重要な兄弟となる。

作曲家への道程

サンクトペテルブルクの法律学校（10歳～19歳）

息子の才能に目覚ましいものをよほど感じ取ったのか、父と母は、１８５０年８月、ピョートルを遥かな帝都サンクトペテルブルクの法律学校に入学させた。なんと、母、姉ジナイダ（先妻の娘）と妹のアレクサンドラが伴って行った。５月に生まれたばかりの双子の２人の弟は残して。　到着の直後に母は子供たちを連れてアレクサンドリン劇場へ連れて行き、グリンカのオペラ「皇帝に捧げた命」を観せた。

ピョートルを法律学校の予備校である寄宿舎学校に入れたのである。１８５１年５月に法律学校本科への進学試験に無事合格し、法律学校７年生になった。ということは、息子を将来性豊かな文官として育てたいと考えたようであるが、ピョートル本人の嗜好となる才能は、それを素直に受けても、好きなところに伸びていくとは父母は思いもよらなかった。

１８５４年６月、母アレクサンドリアがコレラで病死する。１４歳の時の母との突然の別れは、激しい衝撃を与え、彼の音楽の基調となっている哀愁感を生むことになったのであろうか。

ピョートルの法律学校は超エリート学校で、１８３５年に貴族階級出身の法律家を養成するためにつくられたものであった。ピョートルは在学中にドイツ人のピアニスト、キュンディンゲルにピアノを習っている。彼の兄がヴァイオリニスト、作曲家でもあったので一時音楽理論を習った。学校内ではミサのための合唱団があって、有名な指揮者ロマーキンが指導に来ていた。ピョートルも参加し、ソロを歌ったり、代理で指揮をしたりもしている。

そして当時のロシアの首都であったサンクトペテルブルクには、三大劇場

マリインスキー劇場

ミハエロフスキー劇場

ボリショイ劇場

があり、しょっちゅうイタリア･オペラ団が来ていた。

ロッシーニ、

ベルリーニ、

ヴェルディ、

モーツァルト（特に「ドン･ジョヴァンニ」に深い感銘）、

マイヤベーア

など、凄腕作曲家たちのオペラを見ることができ、貴重な音楽鑑賞の体験を積んだ。

法務省時代（19歳～23歳）

１８５９年５月、ピョートルは、１９歳で法律学校を立派な成績で卒業した。卒業と同時に九等官の官位を当てられ、本人の希望で６月３日法務省第一部（管理部）に配属された。最終的に１８６７年（２７歳）に官位は七等官、陸軍中佐相当の地位になる。

しかし、彼にとってそうした仕事自体は興味あるものではなかった。その分遊びの方に熱心でもあった。その中でもゴリツィン公爵（1832-1901）は、生涯にわたって影響をもつ人物となった。この公爵は教養の高い文化人でもあったからである。親族以外に女性と接触のないピョートルは、興味はなくても女性たちにも近づいてはいる。

妹アレクサンドラが１８６０年、レフ･ヴァシーリエヴイチ･ダヴィドフと結婚したので、１０歳の双子の弟たちモデストとアナトーリイを世話する者がいなくなった。ピョートルは夜帰って来て、彼らと遊んでやった。この頃から兄弟三人はたいへん親しくなっていく。

１８６１年の夏休みにピョートルの最初の外国旅行（６月末から３ヶ月間）を父の友人の通訳という名目で、ドイツ、ベルギー、ロンドン、パリを訪れている。８月24日、モデストとアナトーリイはピョートルにならって法律学校予備クラスに合格する。この頃のピョートルは無気力な典型的な貴族の若者と交際し、浪費家となり、借金に苦しむ姿を見せている。一方、同時に音楽家としての芽生えも始まる時期であった。妹アレクサンドラへの手紙（1861年12月４日）で、かなり正確な自己分析する姿がおもしろい。

> “音楽理論を習い始め、とてもうまくいっていることについては、もう書いたように思います。僕のかなりの才能（自慢だと思わないで下さい）を考えれば、この分野で幸運を求めないのは得策でないと思うでしょう？　僕が恐れているのは個性の無さだけです。おそらく怠け癖が例の働きをして、僕も勝てないかも知れません。”

この頃、年齢的に３倍年上のイタリア人の音楽家ルイージ･ピッチョーリ（1812-68）との友情は、ピョートルの音楽的発達に影響を与え、声楽やイタリア語も学ぶことができたのである。

大転回：

サンクトペテルブルク音楽院時代（22歳～25歳）

人生には、不可思議な出来事がある。それは「導師との遭遇」であろう。どうしようもない天啓である。夢もない慣性による勉学と知識経験の蓄積、出会い、閃き、突進そして夢に辿り着く。私の場合は、読書において次の四つの名著に出会い、魅入られるようにそれぞれ数回、熟読してしまった。

白土三平「カムイ伝」　＜２０代＞

吉川英治「新書太閤記」　＜３０代＞

司馬遼太郎「坂の上の雲」　＜４０代＞

宮城谷昌光「孟嘗君」　＜５０代＞

これらとの邂逅が無ければ現在の私は無い。

ピョートルの**大転回**は、二人のルビンシタイン兄弟によってもたらされた。それは、何かを感じ取る鋭敏なセンスを持っていたからである。常人にはめったにない才能オアシスへの渇望であろうか。

当時のロシアではまだ職業音楽家の確立がなかった。そうした情況の中でピアニスト･作曲家、ユダヤ系ロシア人、**アントン･ルビンシテイン**（1829-94）の存在は異例であり、ロシアの音楽界にとって多大な貢献した人物である。ロシア音楽協会を1859年に創設し、サンクトペルブルク音楽院を１８６２年に創立した。

彼は導師として、ピョートルの人生を１８０°転回させるほど、直接的に大きな影響をもたらした。彼の存在なくしては、大作曲家ピョートル・チャイコフスキーは存在しなかったといえる。１８５８年の夏、アントンは４年にわたる二度目のヨーロッパ大演奏旅行から凱旋して帰って来た。彼はロシアで大きな評価を得て、大公妃エレーナのお抱え音楽家となる。その立場を利用して先ずロシア音楽協会を設立し、演奏活動の組織化と音楽教室を作ってプロ音楽家の養成に着手した。

この音楽教室から１８６２年９月に昇格した

サンクトペテルブルク音楽院

は、ロシア初の音楽院となった。アントン・ルビンシテインは創立者にして初代院長であった。ピョートルは音楽教室時代に聴講生として、憑かれたように音楽理論のクラスに入っていた。

ついにピョートルは１９６２年８月にサンクトペテルブルク音楽院の第１期生になった。

1863年

妹アレクサンドラへの手紙（1862年９月10日）：

“僕は新しく開かれた音楽院に入学しました。そこでの授業もまもなく始まります。お前も知っているように、去年は音楽理論を物凄く勉強しました。そして今では、僕が遅かれ早かれ音楽に仕事を変えることを、はっきりと確信しています。僕が大芸術家になるつもりなどとは考えないで下さい。”

音楽院でのピョートルの同級生は１７９人で、様々な経歴をもっていた。グルジア（現ジョージア）人やイギリス人も含まれていた。因(ちな)みにピョートルはこの時、法務省課長であった。音楽理論クラスの同級生に、生涯の友、モスクワ音楽院の同僚、彼の作品の支持者になるゲルマン・ラロシ（1845-1904）がいた。

ピョートルはピアノにおいて優れていて、３ヶ月もしないうちに必修のピアノ課程を修了されている。そして音楽院のあらゆる科目に勤勉で、並外れた優秀さを示した。音楽院に入って３年して**音楽以外に自分の道はないと確信**したようだ。

１８６４年の夏、作曲家の学生に課題が出された。彼はオストロスキーの戯曲「雷雨」を標題にし、その序曲を書いた。彼は大チューバ、イングリッシュ・ホルン、ハープ、分奏によるヴァイオリンのトレモロ、大太鼓とシンバルといった当時のロシアでは、異端的なブラスを多用する**管弦楽法**を用いた。しかし、これが師アントン・ルビンシテインの不興を買うことになる。この師はシューベルト、シューマン、メンデルスゾーンといった時代に育っていたので、このような新しい動き、すなわちベルリオーズ、ワーグナーといった総天然色の管弦楽法には否定的であった。

さらに、当時ロシアで台頭していた国民楽派（民族重視）、すなわち５人組

バラキレフ（代表）、
ボロディン、
キュイ、
ムソルグスキー、
リムスキー=コルサコフ

と、アントン・ルビンシテインの率いる音楽院派は激しく対立していたのである。

このような対立はこの時代のロシア文化にありとあらゆる所で現れた。政治的対立というよ

り観念主義と現実主義の対立と言える。これは、ドイツにおけるブラームス派（古典重視）とワーグナー派（革新）の対立にも似ている。さらにピョートルが序曲の題材として用いた「雷雨」（1860年）は、ロシアの進歩的な階層に支持された戯曲であった。そのため、そうしたピョートルの態度にも師は反感を覚えていた。様々な攻撃の対象にされているアントン・ルビンシテインは、被害妄想的に自分に対する反逆と捉えてしまったのである。１８６５年末、２５歳のピョートルは音楽院を優秀な成績で卒業する。卒業作品「歓喜に寄せて」に対して、ロシア５人組のキュイから激しい酷評を受けたけれども、バラキレフには好感を持たれた。

そして、恩師アントン・ルビンシテインの紹介により、６歳年下の実弟

ニコライ･ルビンシテイン（1835-81）

との決定的な出会いが、就職先として活躍の場をモスクワへ移すことになる。

＜モスクワ時代（26歳～38歳）＞

１８６６年１月に音楽教授としてモスクワに着いた。第二の導師ニコライ・ルビンシテインは、ピョートルの給与が安いことを心配して自分の家に住むように導いた。彼は、

モスクワ音楽院

創立者で初代院長であった。彼の家での寄宿生活は、ピョートルには負担が感じられた。ピョートルは弟たちに彼のことを、“乳母のように世話を焼きたがる”とこぼしている。

チャイコフスキー記念モスクワ音楽院：1940年設立
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Здание_консерватории1.jpg?uselang=ja

しかし、ニコライは音楽的なことについても面倒をみて、サンクトペテルブルクの５人組とも交流があったのでピョートルに利することも多かった。こうして恵まれた環境の中でモスクワ時代の当初からピョートルは作曲に没頭できた。

１２年間のモスクワ音楽院におけるチャイコフスキー教授の担当は、基礎理論、和声学、管弦楽法（作曲も含む）であった。１８６６年には、最初の挑戦的なシンフォニー

交響曲第１番ト短調“冬の日の幻想”Op.13　1866年 26歳

を完成させ、１８６８年に大成功のうちに初演ができた。

１８６７年９月、サンクトペテルブルクのニコライの兄アントンは、ロシア音楽協会とサンクトペテルブルク音楽院のすべての仕事から手を引いた。ロシア音楽協会の音楽監督にはバラキレフ、音楽院の作曲教授にはリムスキー=コルサコフがつき、これによって音楽院派対国民楽派の対立は解消されたのである。サンクトペテルブルクの５人組とモスクワのピョートルとも結びつきが密になっていく。こうして１８６８年にはピョートルは国民楽派５人組と知り合い、相互の理解を深め、つながりができていった。

１８６７年の暮れにサンクトペテルブルクを訪れていた**ベルリオーズ**（64歳）がモスクワにも来演した。この時ピョートル（27歳）は、ベルリオーズの『幻想交響曲』に代表される標題音楽への影響を受け、交響曲第５番などに反映することになる。もともとは、ベルリオーズ自身もベートーヴェンの『田園交響曲』に源を発している。

次はオペラ「地方長官 Op.３」の初演は１８６９年１月ボリショイ劇場で行われ、大成功であった。この時、モスクワで知り合い、深い関わりを持っていく重要人物の一人が、出版企業家ユルゲンソン（1836-1904）であった。ピョートルはユルゲンソンの出版の要求に応え、音楽院で使う理論書を執筆し、西欧の理論書の翻訳も行った。またユルゲンソンのすすめで、民族主義的な作品も手がけていくようになる。ユルゲンソンはチィコフスキーの将来を見抜いて、出版を積極的に系統的に行っていく。また彼はピョートルの手稿や手紙も収集保存し、膨大な資料を私たちに残している。

バラキレフとの交友を通して標題音楽「幻想序曲“ロメオとジュリエット”」（1868年）などや、民謡の引用で有名な

弦楽四重奏曲 第１番 ニ長調 Op.11 1871年 31歳
第２楽章“アンダンテ･カンタービレ”

を作曲した。

１８７１年８月末にニコライの家を出て、アパートに住むことにした。音楽院では週２７回の授業で２７００ルーブル（約７００万円：想定換算レート２．５千円／ルーブル）の年棒を得て、経済的にも楽になっていた。

参考：http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html「ピョートルの生涯」より

http://www.a-saida.jp/russ/imperija/dostojevskii.htm

当時の1ルーブルは約 2200～2700 円

幕末・明治初年と現在の貨幣価値の変動率（物価推移）

当時の1円が現在の何円に相当するのかについては、戦前基準企業物価指数、明治以降物価推移などで換算できる（生活実感により近いと思われる消費者物価指数が現れるのは昭和 21 年以降）。 途中の計算は省略するが、明治初年の1円の価値は、現在（平成年間）のおおよそ 3000～3600 円見当であろうか（換算に使用する指数によって、8000～9000 円という数値も出てくる）。

したがって、**当時の1ルーブルは約 2200～2700 円** ということになるが、本位貨幣の実質的な価値（当時の為替レートになるものと思われる）で単純に比較することの是非、換算に使用する物価指数、その物価指数と生活実感とのずれなどを、どのように考慮するべきか、極めて難しい問題がある。

第１番

壮麗なることキエフの大門の如く、　　＜序奏＞
麗しいことエルミタージュ美術館の如く、　＜第１楽章＞
清涼たることウクライナ平原の如く、　　＜第２楽章＞
爽快たることバイカル湖の如し。　　＜第３楽章＞

やはり、何が何でも第１番だ。ピョートルが３４歳で書いたピアノ協奏曲第１番変ロ短調作品２３から始めなければなるまい。まさに、木の王様“檜”に喩(たと)えられる。ヒノキは育つのが遅い。木曽には数百年歳もの檜の大木が群生しているが、昔から誰も伐採してはいけない決まりがあるという。太古の昔から神道を敬(うやま)う日本民族の矜持であり、いまは宮内庁のしわざだ。

伊勢神宮の２０年毎の式年遷宮のためだけに伐採して使うから、と言われている。それほど貴重品として扱われているのだが、それは伊勢神宮だけの特権であり、《第１番》という世界で最も演奏回数が多い名曲にそぐわない。ところが、何と遷宮の度に出る旧社の廃材檜は２０年しか経っていないから、丁寧に解体・保存されて日本中の神社・仏閣に配られるという。お下がりではあるが、大人気で、全国に拡がるのである。

ヒノキ自体は硬くはないが、切られてから数千年も剛性つまりヤング率がさほど劣化しない木材第１位の特質を持つ。堅い欅(けやき)は５００年ほどするとボロボロになるという学者の調査結果もあり、一方、檜は雨風にびくともしないというツワモノなのだ。１３００年も経つ法隆寺の建材ヒノキもそのまま腐らずに堅固である。一方、鉋(かんな)かけたあと数年間、木面の柔らかい肌艶とともにその香(かぐわ)しい匂いが辺(あた)り一面に漂う。天邪鬼(あまのじゃく)な私でもうっとりとしまうほど気分がいい。逆に、木を喰らい尽くす例のシロアリを始めとする害虫どもは、その匂いを嫌がって近づかないという不思議さもある。神社が好む魔除けなので、まさに神木と呼ぶに相応(ふさわ)しい。

こうなると、《第１番》こそ、日本の檜に対比させてもおかしくない名作といっても言い過ぎではないだろう。ヒノキだらけの伊勢神宮の壮麗さに勝るとも劣らないし、人間を腐らせる鬱(うつ)なぞは瞬間蒸発してしまうこと疑いない。

あのセンチメンタルな旋律を連発してタタキ売りしてしまうピョートルの性格から、遥かにかけ離れているほど、《第１番》は華麗で鮮烈な名曲であろう。世界中のファンが度肝を抜かれてきている第１楽章の序奏ほど、壮麗かぎりない調べは他に見当たらない。１９歳当時の私も驚嘆した。そして狂ったように繰り返して聴く。最近まで収集したＣＤは、伝説のリヒテル／カラヤン、アルゲリッチ／コンドラシンから始まって７種にもなったが、アマゾン・サイトを観るとＣＤが１００種以上もリスト・アップされている。

芸術度とは、長い年月に亘って、聴かれる回数、演奏される回数に比例する、と言っても間違いないだろう。芸術性はそういった尺度も持つことに留意すべきである。この観点で言えば《第１番》こそ、芸術性第一級ランクに載ること疑いない。

第３楽章にはスラブ的な曲調が出てくるが、これに注目したファンは一皮剥(むし)けている。それも、数多(あまた)のピアノ協奏曲の中で最も激しくピアノとオーケストラが激突して火花を散らすのだから、ピョートルのもう一つの激烈な楽興魂(だましい)が見えてくる。

柿(こけら)落し

若い頃のピョートル

https://www.j-cast.com/trend/2016/11/08282825.html?p=all

ピョートルの作曲家人生は、《ピアノ協奏曲第１番 変ロ短調 Op.23》を創った３５歳より始まったと言っても過言ではない。ブラームスもドイツ・レクイエムを３５歳で作曲、発表し、作曲家としての確固たる地盤を築いたのである。しかも、ウィーン楽友協会を主宰する任務にも就いたのだから、その人気たるや天を衝く勢いでもあったが、決して増長しなかった。

ピョートルの場合は、いきなり第１番であるから、当時の欧州楽界も驚愕したにちがいない。ピアニスト誰もが競って演奏したことであろう。曲のデヴューは、ハンス・フォン・ビューローを魅了して、ビューローのピアノ独奏でアメリカのボストンにて行われた。つまり、ロシアはイタリアやドイツ、フランスの音楽の輸出先でもある辺境とみなされていたのだが、そこから世界を熱狂させる協奏曲が、いきなり出現したのである。まさに、文豪トルストイ（1828-1910）に並ぶとも劣らない文化輸出の先鋒ともなった。

３００年も続いた帝政ロシアのロマノフ王朝(1613-1917)、その皇帝であったピョートル大帝（1682-1725）が首都をヨーロッパ各国に一番近い、最西部のサンクトペテルブルクに建設したのだった。バルト海という海上交通の利便性による交易と文化の交流を盛んにさせる絶好の拠点であった。モスクワが首都になるのはソヴィエト共産党の支配になってからであるが、サンクトペテルブルクは、ソヴィエト連邦という政体に代わって、ロシア共産主義の教祖でもあったレーニンの名を残すとして、無理やりにレニングラードという都市名に変更されてしまったけれども、現在のロシア連邦に替わってからは、旧都市名が復活した。政権が代わっても地理的優位性により、文化交流のハブ機能は根強く続いてきている。

ピョートルもサンクトペテルブルグで学んだ後に、モスクワ音楽院で教鞭をとっていたが、法律学校と音楽院で強い印象を受けたサンクトペテルブルクへの愛着は消えず、やがては移住している。このことが、彼の芸術的霊感の基になっているに違いなかった。ピアノ協奏曲第１番がそれを物語っているように聴こえる。あの壮麗きわまりない序奏と、第３楽章のスラブ的とも思える軽快な響きには毎度ながら聴き入ってしまう。しかも展開が激烈である。

すなわち、ピョートルは確信したのだ。ロシアの魂は、民族的な甘味と激情にあると。前者の甘美さはロシアの均整とれたバレリーナの踊りにみられ、後者はやはりウォッカに喩(たと)えられよう。このことは、以後の作品すべてに共通している。この感覚を背負っていくのは、ラフマニノフやショスタコーヴィチらの後輩たちである。第６番「悲愴」は、第１楽章を除くと、乱脈になって４楽章構成に戸惑いを感じてしまうのは、私だけだろうか。第７番がすでにスケッチ始められていたというから、彼は一過性の創作と思っていたのかもしれない。いずれにしても、第６番完成後、あっという間に他界してしまったから、謎は解けていない。

ピアノ協奏曲

余りにも有名すぎる『第１番変ロ短調作品２３』があるから、それを聴いた途端に私もピョートルの楽興にはまり込んでしまった。が、調べると次のとおり３曲もあるという。

第１番 変ロ短調	作品 23	作曲：1874-75 年、初演 1875 年（ボストン）
第２番 ト長調	作品 44	作曲：1879 年
第３番 変ホ長調	作品 75	作曲：1893 年（未完成）

第２番と第３番はほとんど演奏されないし、昔はレコードすら無かったから私は聴いてこなかったので、それら２曲の解説はできない。

モスクワにおけるニコライ邸での寄宿生活に別れを告げて、自活生活に入った時期にピョートルに大きな事件がいくつか起こってくる。しかし、揉め事が起きれば起きるほど創作活動がより活発になるという不思議さが、この作曲家にある。そして冒頭の世界的超名作

ピアノ協奏曲 第１番 変ロ短調 Op. 23 35歳
（1875年作曲、初演1875年＠ボストン）

が産まれたのである。１８７４年４月から１８７５年２月にかけて完成された。この時、彼はモスクワ音楽院教授であり、既に作曲家としても名を馳せていた。ピョートルのボスであるニコライ（ピアニスト、モスクワ音楽院創立者＆初代院長）に献呈を申し出るが、断られるだけでなく、演奏できないとしてかなりの酷評を受けた。

そのためピョートルはドイツ人ピアニスト＆指揮者のハンス・フォン・ビューローに初演を依頼する。この音楽家はワーグナー楽劇の指揮で有名になったが、妻を奪ったワーグナーと袂（たもと）を分かち、ブラームス交響曲の指揮・演奏に傾倒して勇名を馳せる。

ビューローはアメリカへの演奏旅行にこの第１番を携え、１８７５年、ボストンでビューローのピアノによって初演された。熱狂的な大成功となり、この作品は国際的な作曲家になる一歩となった。この曲は、結果としてビューローに献呈された。

ちなみにニコライは３年後、ピョートルに謝罪し、さらにこの曲をしばしば演奏会で取り上げて世に知らせた。

奇妙な女性関係： デジレ･アルトー（1835-1907）

https://ja.wikipedia.org/wiki/デジレ･アルトー

アルトーはピョートルより５つ年上の優秀なオペラ歌手で、彼女の声にピョートルはすっかり魅せられてしまった。ピアノ曲「ロマンス ヘ短調op. 5」（1868年）が捧げられた。ピョートルは父への手紙（1868年12月）で、「私たちは二人とも結婚を強く望んでいますし、障害が生じないかぎり、夏には結婚する予定です。」と書いている。こうして二人は事実上婚約までした。しかし、ニコライや友人、彼女の母までが猛反対する。その反対理由は、彼女が有名歌手で家庭生活には不向きと考えられた（ピョートルが髪結い亭主のようになると心配したようである）。ピョートルの作曲活動にも支障を来す、というものであった。

結局、彼女の方から身を引くことになる。当然の事ながら彼には何の衝撃も与えなかった。初めから異性として彼女のことは、見てはいなかったと伝えられている。

チャイコフスキーを支えた女性

ナデージダ･フィラレートヴナ･フォン･メック　(1831-94)：

https://ja.wikipedia.org/wiki/ナジェジダ･フォン･メッ

貧乏地主の娘として生まれ、鉄道技師でロシア最初の鉄道建設者･経営者カルル･メック（1819-76）の夫人となった。５男６女の子供を持つ未亡人で、無類の音楽好きだった。ピョートルの作品の虜（とりこ）となる。そして彼のパトロンになると決め、６千ルーブル（約１５００万円）の年金を捧げた。やはり、ピアノ協奏曲第１番の評判の波及効果は、こういった裕福過ぎる豪族、貴族とか王族にまで及んだのである。

１８７６年、かつて、音楽院でピョートルの和声理論の教え子だったヴァイオリニストを介して、ヴァイオリンとピアノのための作品を依頼する。１８７６年１２月、手紙と多額な謝礼が通称**メック夫人**からピョートルに送られて来た（当時彼女は４５歳、ピョートル３６歳）。

これ以後文通が１４年も続く。ピョートルの手紙７６０通、メック夫人の手紙４５１通が残っているという。それほど頻繁に、彼女に作曲や出来事における感慨と憂慮を伝え、彼女からは思いやり豊かな声援を受けた故に、ピョートルは、音楽史上の「チャイコフスキー」に成り得たのだろう。謎めいているが、二人はついに一度も会うことなく文通と援助だけの交際が続いた。やがてのことではあるが、１８９０年９月末、メック夫人の方から財政的困難を理由に、援助を打ち切ってきた。としても、ピョートルは彼女の援助が始まってからモスクワ音楽院をやめ、１４年間もの壮年期に、作曲や指揮という音楽活動に専念できたのであった。ほかにも借金の肩代わりや、外国生活のための費用などもメック夫人から度々受けた。

この彼女との関係の終止符が、そのままピョートルの死につながっていくのであるが、結果論でもある。問題は、ピョートルが絶えず心の女性後援者を欲しがっていたことではないだろうか。同時代のブラームスは、年上の禁断の恋人：クララ・シューマンに支えられた。このことは、作曲家という創造の才能たちは、孤独を愛しながらも絶え間なく女性からのサポートを欲しがっていること、つまり、姉（ねえ）さん先生に憧れる子供のような性情が歴然となる。

かりそめの結婚：　アントニーナ･イヴァーノヴァ･ミリューコヴァ　(1849-1917)

アントニーナは、ピョートルの約２ヶ月半の妻と言ってよいかもしれない。しかし、ロシア正教会の仕来(しきた)りもあって戸籍上は生涯夫婦であった。

１８７７年初夏、突然に一通の熱烈な求愛の手紙がピョートルのもとに届いた。この時アントニーナは２８歳、ピョートルは３７歳であった。彼は一時は断りの返信をしたが、それ以後、短い間の文通が始まり、１８７７年７月聖ゲオルギー教会で式をあげてしまう。司式は音楽院でロシア聖歌史を教えていたラズモフスキー、結婚の証人は弟のアナトーリイとヴァイオリニストのコテック。新夫妻はその日のうちに父親に会うためにサンクトペテルブルクに行き、７月 14 日にはモスクワに帰って来た。メック夫人から借りた 1000 ルーブル（約 250 万円）を携えて、彼一人で妹の住むカーメンカへ行く。そして９月 11 日にモスクワに戻ってくる。

ピョートルとアントニーナ　1877年

９月の中頃、新妻との同棲に絶望してモスクワ川に入って自殺を試みるが、未遂に終わる。９月23日モスクワの妻の元からサンクトペテルブルクへ逃れた。なお、彼女は打算の人であり、**完璧な音楽不感症**だったらしい。それ以後、生涯、妻の顔を見ることはなかったのである。

ピョートル作品の出版者：ユルゲンソンの仲立ちで離婚成立の努力をしたが果たせず、死ぬまで籍は抜けないままであった。彼女には生涯仕送りを続けた。彼女は他の男との間に、３人の私生児を生んで孤児院に入れている。1896 年には精神病院に入れられた。彼女自らはチャイコフスキー姓を名乗ることはなかったという。

アントニーナは、モスクワ音楽院に入学して学び、４年以上密かにピョートルを愛し続けていたと言い、彼も思いを寄せていたが内気で打ち明けられなかった、と言っている。１８７７年６月にピョートルが彼女の所を訪れて、

“私は一度も女性を愛したことがないし、熱烈な愛情を持つには年を取りすぎていると思うし、そのよう

な愛情は誰にも持たないと思う。しかし、あなたは私の気に入った最初の女性だ。もしあなたが静かで平穏な愛で満足するのなら、あなたに結婚の申し込みをする”

と述べ、彼女はすぐ話がまとまったと話している。そして忘れられない劇的なキスを交わしたという。このように彼女には事実とは異なる妄想的な思いや発言があったらしい。

ピョートル自身が結婚前後に記した妻アントニーナについての記載は、次のようである。

メック夫人への手紙（1877年７月３日）

ここで、私は未来の妻について少しお話しします。名前はアントニーナ･イヴァーノヴナ･ミリューコヴァといいます。年は28歳です。かなり美人です。評判も悪くありません。とても感じのいい母親がいますが、仕事をしながら一人で独立して生活をしてきました。とても貧乏で教育も中級以上ではありません（エリザベート専門学校で教育を受けています）。見たところ、とても善良で、逆らい難く魅了させる力があります。

メック夫人への手紙（1877年７月28日）

第一に、私に心から心酔している娘ですからきっとすぐに好きになれるであろうと思われたし、第二に、私の結婚が私の年老いた父や、その他の近親者の待ち望んだ願いを叶える事であることを知っていたからです。しかし、式が終わるとすぐ、そして、妻と二人だけになったことに気づくとすぐ、今やわれわれは互いに別れることなく生活する運命にあるのだということを意識して、彼女が私に単なる友人としての感情も起こさせないばかりか、言葉の最大の程度において、私にとって憎悪すべきものであることに、私は突然気づいたのです。私が、あるいは、少なくとも私の唯一とさえいえるよい部分、**つまり、音楽性が、永遠に死滅してしまったように私には思えたのです。**

こんな不幸な結婚問題などの事件の前には、とてつもなく美しい名曲でもある次のバレエ曲が作られた。信じられない！！

白鳥の湖 Op.20（1875-76年作曲）

https://www.nntt.jac.go.jp/ballet/15swanlake/

この曲は余りにも有名すぎて、説明の必要もないだろうが、割愛はできない。ピョートルのいわゆる「３大バレエ」の中で最初に上演されている。１８７７年にモスクワのボリショイ劇場で上演されたが，この時はさほど話題にならず。結局，チャイコフスキーが生きている間は棚上げされてしまった。ピョートルの死後，有名な振付師マリウス・プティパとその弟子であるレフ・イワーノフが振付を担当し，ストーリーにも手が加えられて，絶賛されたのだが。

超名曲につきまとう《ジンクス＝埋没》というには、悲しいほどの名曲だった。

www.robundo.com/salama-press-club/wordpress/02/2018/09/22/【公演】キエフ・バレエ%EF%BD%9C『白鳥の湖』-松本公演/

また、オペラ「エフゲニー･オネーギンOp. 24」（1877-78年作曲）を始めた頃に結婚の申し込みを受けた。

１８７７年の結婚の破綻に続いて１８７８年秋、モスクワ音楽院を辞めることになる。メック夫人からの年金６０００ルーブル（現在の円換算：約１５００万円）は、音楽院から受ける年棒の２倍にもなる額であった。さらにロシア音楽協会からも年金をこの頃から受けることができた。作曲の収入も増え、経済的にはきわめて安定していたからであろう。

参考：http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html「ピョートルの生涯」より

第４番

クラシック巡礼の旅：旅立ち

2012.11.22　2019.8.09改　別当 勉

１９歳当時のMは、人生で一番暗く情けない時代だった。

大学というキャンパスに飛び込んで、昔からの友達が一人もいない。馴れ馴れしく声を掛けてくれる悪友もいないことに気付いた。片田舎の高校出身でも独りで受験戦争に挑み、勝ち上がったMの自負心ゆえに、友を求めることにも嫌気がさして殻に籠って大学生を始めていたのだ。都会の猛烈な通勤ラッシュに揉まれて学校に行って、ほっとしながら講義を聴いても頭に入らない。そんな状態で、一年目の夏休みにアルバイトを始めたのもまずかった。もう、講義はどうでもいい。面倒くさい言葉と文字だらけの世界から逃避したくなったのだ。こんな無駄なことをして何になるんだろうか。疑問は解けないまま。アルバイトすれば、何とか食べて暮らせるのに、どうして、解析、線型代数、一般力学、電磁気学、化学、図学、実験＋レポート、演習＋レポート、英語、仏語、文化人類学、計量経済学、体育科目など頭が痛くてしょうがなかった。

次第に、Mはキャンパスから離れて安易なアルバイト先に溶け込み、フリーター放浪で都会を彷徨った。仕事が終われば、都合よく肉体的な疲労が自然に訪れて熟睡し、通学という義務を忘却したが、目覚めるとMの心に重くのしかかる。仕送りしてきている実家への背信に、心は疾しく病んで、とりとめもなく懺悔に苛まれる。小中高とスムーズに育ったMではあったが、絶えず成績が優れてチヤホヤされてきたから、孤独と挫折に脆い、精神的に未成熟に育ってしまったことは否めない。大学に入ってもトップクラスを保たねばいけないというプレッシャーが深層心理を痛めつけたことも確かである。中途半端な出来を許さないのである。適当にしつらえるとか、学友にすがりついてレポートを写させてもらうとか、完敗を意味し、それなら全部やめたほうが良いと思った。このような理想と現実の妥協を許せないという頑固さを捨てきれず、逃避に走ったのである。

一方、まわりを観察すれば、駅で朝から颯爽と通勤、通学する人々を見て、羨ましさを僻みで打ち消す始末だった。しかも、Mは田舎ものゆえ、他人に相談するとか悩みを打ち明けることは鼻から頑迷に拒否してきた。情意よりもメンツに拘る風土に育まれたから、言葉に幅も奥行きもなく、口下手そのままで都会育ちのハイカラでお喋りの同輩との話に乗れず、自然に仲間はずれ。

このようなMの心理状態を、いまのMが分析すれば、基本的に「Mは狷介でも朴訥な青年」だったと言ってもいいだろう。つまり、他人に悩みを語るということは、悩みに悶える自分と

口先で飾る自分とを分けてしまう、ある程度、己を誤魔化す操作が必要なのだ。こういったことに、Mは狷介な野生児ゆえに許せなかったのか、気付かずに１９歳になってしまった。Mはあくまでも一人の自分に拘ったから、健康的ともいえたのである。ただ、そこをベースにすればよい、ということに気付かなかったのだ。

［ 注:「狷介」とは、心が狭く自分の考えに固執し，人の考えを素直に聞こうとしないこと。 ］

いつのまにか音楽鑑賞という受身で無気力の趣味にはまる。かろうじて己を失わず、これはこれで「審美眼」の育成というかけがえのない貴重な経験を積んでいた。

そのように学業から逃避して凡そ１年以上が過ぎた。自責と開き直りのせめぎ合いで、このままいけば夜逃げして負け犬人生を送らざるを得なくなる。切れる限界が目の前に近付いてきている。ふらふらと街を歩いている時、レコード店で端正な美貌のカラヤンが表紙になったチャイコフスキー・オムニバスに目が釘付けとなった。そのカラヤンの眼に愕いた。何と透き通った美しい目線をしているのか。すこし上向いて抱負に溢れたマスクに妬ける以上に憧れ、１万円（当時のアルバイト半月分）もする５枚組を買ってしまった。

チャイコフスキー：第4番、第5番、第6番、ピアノ協奏曲第1番などの5枚組アルバム

そして、チャイコフスキーの交響曲**第４番**に遭遇したのである。第１楽章はブラスのシンフォニーともいわれる所以の楽章であるが、凄まじいラッパの競奏に自責だらけのMの魂魄が呼び覚まされたのである。

ようやく、第１楽章コーダ（終結部）の切々とせり上がる弦のユニゾンが

「もういいよ、そんなに自分を責めなくて、もういいよ」

と、自堕落の地獄であえいできた見えない鎖を外してくれる。その優しさにこみ上げて泣きじゃくる。駄目押しのようなブラスの咆哮が、

「絶対に直る、諦めは駄目、希望むんだ、さあ立ちなさい！」

と何度も勇気を鼓舞する、彷徨ってばかりの日々がボロボロに引き千切られる。

ようやく、Mは煮え切らない現状から逃げることなく、この**第４番**に励まされて己を冷静に見つめ始めた。大学に行くと決めたのは自分なのだ。問題は自分に弱いことだけだ。他人がからんだものはない。やはり、自分は他人にすがることなく一人で立ち上がらねばなるまい、遅れて再出発とはなるが、長い人生では間に合うかもしれない。

今の自分を捨てるのは今なんだ。（吉田拓郎「間に合うかもしれない」）

と、決意はできた。これまでの自堕落の日々は、心の重荷として背負って行けばよい。そうすれば、初心に戻れると吹っ切れた。実家には大変な浪費を与えてしまったが、多くの兄や姉たち（７人）の大きな寛容という慈愛に包まれたから助かった。ピョートルの**第４番**とともに死んでも忘れることはできない。

《つづき》

この時の決断は、１９９８年の山田太一作「風になれ鳥になれ」というドラマで期せずして再現され、渡哲也の名演技にも胸がふるえた。解消できない過去の自責の悔い、あるいは、自分ではない自分（親兄弟、家族）のどうしようもない難題は切り捨てずに、死ぬまで背負っていくことで「生きる力」が蘇（よみがえ）るというドラマだった。

１年目の目標である学業とアルバイトの両立を完璧に果たした。キャンパスでは、次第に自然に学友ができて、最難関の第３学年目の電磁気学演習は、毎週、たった一つの問題に最短で５時間の苦闘を強いられる。講師は待たずにレポート受けのポストと刻限を指定して消える。教室は、必死に解く者、諦（あきら）めて本を読む者、どこかに行ってしまう者、おしゃべりする者などで、ガヤガヤ状態。それでもMはなんとか１０頁ほどの解答を仕上げた。それを写そうと数十人が待っている状況にもなった。ここまで達するとビクともしなくなって、余裕よりも確かな自信に満ちて、ようやく抒情の

《アンダンテ・カンタービレ》
弦楽四重奏曲 第１番 ニ長調 Op.11 第２楽章（1871年）３１歳

が聴けるようになったのだ。

鳥飼いという自信

上泉伊勢守信綱の新陰流（しんかげりゅう）の教えに「鳥飼い」というレッスンがある。「鳥」とは絶対の自信であり、それを己の胸（籠）に飼うという境地、すなわち、白刃（はくじん）がきらめく修羅場でも、絶対に斬られないという平常心で戦える自信である。後で考えると、自堕落（じだらく）からの脱却（だっきゃく）を果たしたことが、知らないうちにMは隼（はやぶさ）を飼ってしまった。だから、堕ち込んで沈んだり、悔やんだり、恐怖におののいたりするMをじっとみている鳥が胸にいた。二重人格という分裂症にならずに「心の重心」が備（そな）わったのだ。

暗い時代ではあっても、一筋（ひとすじ）だけ光り輝く音楽鑑賞という趣味において、とある一曲に出会っただけでコミュニケーションの片輪者（かたわもの）が治（なお）ってしまい、Mはやっと一人前に飛び立ったので

ある。その後は前述したように、抱負どおり学科上位で順調に推移した。

就職が決まって髪を切ってきたとき（ユーミン「いちご白書」）、「Mは話が上手い」と友人から誉められ、すこし蒼くなった。

いま思えば、ひたすら受験勉強して登ってきたMであったから、同じように、いやそれ以上に出来るはずだ、という頼りない筍みたいな自負があったことは確かである。それゆえに、再起と云う荒々しい山を登ることに怖れを覚えなかった。ただ、螢雪の高校時代に、やがての社会人という将来の夢と目標を持つという努力が欠落していたことは残念でもある。読書が一番、それにもあけくれた大学時代後期になって初めて解った。そうすれば、その山の意味付けに２年も遠回りすることはなかった。夢も希望も面映ゆいけれども、心を新たに切磋琢磨するためには必須なのである。

このようなことは多かれ少なかれ、誰しも経験するかしたかであり、取り立てて述べる必要も無い。ただ、果てしない音楽芸術への憧憬と探求が青春のド真ん中で合流し、それがMにとっては重大事だったことを掲げたいだけである。第１回クラシック巡礼「ルードヴィッヒの夢」の初文で述べたように、せかせるような「テンペスト」の感激が芸術と精神の繋がりに意義を認め、自分の人生を左右したほどになったと述べた。まさに、ここにつづった若き日の苦悶とそこからの脱出がその証左でもあった。

諧謔性の矯正

Mの良くない性格である諧謔性（ふざけること）、すなわちスケルツォであるが、これに対する矜持としては、『音楽巡礼』の作家：五味康祐の丹下典膳をあげねばなるまい。再起してから、同じアパートにいた哲学科の先輩に薦められて読んだ薄汚れた文庫本が「薄桜記」であった。今も本棚にあるが、このあいだ読み返して身震いするような感動を新たにした。その後、偶然にもＮＨＫがドラマにしたが、脚色され過ぎて武家社会の恋愛劇になってしまった。

原作をかいつまむと。

> 典膳は直参旗本で剣の達人。満開の桜の下で典膳が見染めた美女；千春、上杉藩江戸家老の息女。期せずして偶然のようにめでたく娶る。その新妻が姦通したという噂。真相究明は彼女を自害まで追い詰める。狂言で噂を打ち消して一方的に離縁。それに怒り狂った義兄に左腕を斬りおとされ、お家断絶、隻腕で不自由な貧乏浪人ぐらし。数年して上杉藩城代家老千坂兵部が病死する。ふたりの婚姻に熱心に労をとってくれた恩人。典膳へ残された遺言にまみえ、その中で、兵部は、典膳の行為と武士の情けを紐解いて賛美した。まさに「士は己を知る人の為に死す」と即断して、兵部から依頼されたとおり、武士として毛嫌いしている吉良上野介の警護を請ける。無二の親友；堀部安兵衛らの赤

穂浪士に敵対。親友と彼女、相反する義理と人情に苛(さいな)まれるが、典膳が択(と)った決意。雪が積もって薄く咲いたようなあの桜の下、討ち入り前夜に安兵衛と決闘して斬られる。

テレビ・ドラマと決定的に異なる。男からみた男の真情が演出されていない。つまり、惚れた千春との夢のようであった暮し、ありえない極上の奇跡をかなえてくれた人々に、全てを捧げた。弁明したいことは山ほどあったけれども、それをつぶさに悟ってくれた城代家老の千坂兵部の武士のこころに感泣した。そして、惚れた千春を絶対に悲しませまい、凄まじいほど己(おのれ)を韜晦(とうかい)した侍のロマンが香る。しかも、さりげないから、文脈に感じなければ永遠に分からない。Mの心に深く刻まれ、この男の生き様(ざま)には遥(はる)かに及ばないが、男としての矜持(きょうじ)に、かけがえのない灯(ともしび)となった。いまでもショパンのノクターン第２０番を聴くと、典膳の「無償の愛」が悲しく沁(し)みてくる。

［注］ 韜晦： つつみかくすこと。例えば、誇るべき自分の地位・才能・行為・心事などを。増長を慎むとか、他人への中傷または悪影響を避けるために大切に胸にしまうという意味合いがあり、決して言うべきことを隠すことでは使われない。

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op. 35 （1876-1877年）

ここで、時期的にもこの華麗な協奏曲を採り上げねばなるまい。

すべてのヴァイオリン協奏曲の中でも特に人気の高い曲で，メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ホ短調と双璧である。この２曲はＬＰ時代から組み合わせて収録されることが多く，「メン・チャイ」の略称で親しまれてきた 。ベートーヴェン，ブラームス，メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲と合わせて「四大ヴァイオリン協奏曲」と呼ばれることもあるが、旋律の美しさ，躍動感のあるヴァイオリン演奏の技を堪能できる点では随一の曲であろう。

現在では押しも押されもせぬ名曲だったのに。最初，この曲を献呈しようとした名ヴァイオリニストのアウアーからは「演奏不能」の烙印を捺され，ウィーンでの初演も酷評されてしまった。今から考えると信じられないが，名曲にはこういうことがよくあるようだ。

この協奏曲については，初演を行ったヴァイオリニストのアドルフ・ブロツキーが繰り返しこの曲を演奏したこともあり，次第に真価が認められるようになった。その後，アウアーも反省し，この曲を演奏するようになったとのこと。

交響曲第４番 ヘ短調 作品36 （1877年～1878年） ３７歳

作曲は１８７７年。この年、ピョートルの人生にとって大きな出来事が二つあった。ひとつはアントニーナとの結婚と破局、もうひとつはメック夫人からの賛美と後援、かつ経済的援助の始まりである。

これら相反する事態が、繊細すぎるピョートルの魂を苛（さいな）んだのであろう。絶望と希望が同時にやってきた。鋭敏な創作の力を擁する彼の魂がそのままこの曲に現われ、１９歳の私の魂に飛び込んできてしまったのである。私には、絶妙としか言いようがない遭遇であった。

ピョートルは交響曲を、次のとおり６曲ほど作曲し、第４番は中ほどの壮年期に創られた。この第４番、第５番および第６番は、三大交響曲として人気が高く、世界中の名指揮者が採り上げて録音しており、演奏回数も飛び抜けている。

交響曲第1番 ト短調“冬の日の幻想”	1866	26歳	op.13	管弦楽法への指向
交響曲第2番 ハ短調“小ロシア”	1872	32歳	op.17	
交響曲第3番 二長調“ポーランド”	1875	35歳	op.29	
交響曲第4番 ヘ短調	**1876**	**36歳**	**op.36**	**メック夫人からの支援開始**
交響曲第5番 ホ短調	**1888**	**48歳**	**op.64**	
交響曲第6番 ロ短調“悲愴”	**1893**	**53歳**	**op.74**	**この後に他界**

アントニーナがピョートルに熱烈な恋文を送ったのは、同１８７７年３月末頃のこと。ピョートルはその熱心なアプローチに気圧（けお）される形で７月に結婚してしまった。しかし、２人の同居生活はまもなく破綻。婚前にピョートルは気付かなかった。新妻の**完璧な音楽不感症**、それが判明した。その彼女から逃れ、９月２７日に離婚希望を伝えた。その後、アントニーナは愛人の子供まで生むものの、離婚は成立せず、ピョートルは断続的に支援を続けざるを得なかったという。

メック夫人は、長年にわたってピョートルを金銭面、精神面で支えていた富裕な未亡人。一度も会うことなく、厖大な手紙のやり取りを通じてピョートルの相談相手になっていた友人でもある。１８８１年以降、メック夫人は財政難にあったが、支援を打ち切ったり、返済を求めたりすることはなかった。彼女は牙城の崩壊を必死に耐えて、この関係は１８９０年、ピョートル５０歳まで続いた。ちなみに、夫人が支えたのはピョートルだけではない。若きドビュッシーへの援助も行っていた。

また、１８７７年といえば、ロシア・トルコ戦争が起こっていた時期とも重なる。ピョート

ルの手紙には、この戦争に対する憤り、不安などが綴られていて、こんな時に「自分のことで涙を流すのは恥ずかしいことです」とまで書いている。

交響曲第４番は、このような精神的、政治的状況下で生まれた。芸術家が生み出す作品に、実生活と分けて考えるべきものと、分けては考えられないものがあるとすれば、第４番は間違いなく後者だろう。これはピョートルが当時抱え込んでいた真情がもろに噴き出した作品と言える。

この交響曲は、ベートーヴェンの交響曲第５番にヒントを得て書かれた。つまり、暗い運命との闘争から勝利へ、という図式に則(のっと)っている。音楽に込められた意味も、ピョートル自身によって明らかにされている。

思いつめたピョートル
http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html

彼は、メック夫人のためだけに**「私たちの交響曲」**と言い、各楽章について以下のとおり手紙で説明しているのだ。

第１楽章の冒頭には、次のようなテーマが込められているという。

「これは『運命』です。すなわち、幸福の追求を妨げる運命の力。平和と慰安が満ちあふれ晴れ渡らないように嫉妬深く監視している力です。そしてダモクレスの剣のように頭上に垂れ下がり、つねに魂に毒をもたらします」

ダモクレスの剣とは

常に身に迫る一触即発の危険な状態をいう。 シラクサの僭主ディオニュシオス1世の廷臣ダモクレスが王者の幸福をたたえたので，王がある宴席でダモクレスを王座につかせ，その頭上に毛髪1本で抜き身の剣をつるし，王者には常に危険がつきまとっていることを悟らせたというギリシアの説話にちなむ。
https://kotobank.jp > word > ダモクレスの剣-94463

悲劇的な暗さ、真摯な烈(はげ)しさ、そして複雑な構成を持った第1楽章を書くにあたり、ピョートルはかなり苦しんだようだが、最終的にその苦しみは凄絶な輝きに変容している。圧巻なのは、第２主題が現れてから「運命」の主題が復帰するまで。閃きにくわえて、冷徹かつ強靭な意思力がみなぎっている。

第２楽章は、憂いに満ちた甘いメロディー。一人の詩人となって綴っている。

「交響曲の第２楽章は、悲哀のもうひとつの相をあらわしています。仕事に疲れ、夜半にただ一人家の中に座っている時、彼を包み込む憂鬱な感情です。読もうと思っていた本が、手からすべり落ち、多くの思い出が湧いてきます。こんなにも多くのいろいろなことが、みんな過ぎ去ってしまったというのは、なんと悲しいことでしょう」

第３楽章のスケルツォは、弦楽器のピッツィカートに彩られている。

「ここにあるのは気まぐれな唐草模様。酩酊の最初の段階で、われわれの脳裏にすべり込んでくるぼんやりとした姿です」

　このピッツィカートはトリオで中断され、今度は木管が活躍するが、まもなく金管による軍隊の行進曲が聞こえてくる。最後はピッツィカートが再現され、木管、金管も一緒になってささやかなクライマックスを形成する。巧みな音の配色とリズムの展開で魅せる楽章である。

第４楽章は、強烈なff：フォルテシモではじまる。第２主題はロシア民謡の「野に立つ白樺」をモチーフにしたもので、この美しいメロディーが様々な形にほぐされ、絡(から)まりながら進行する。緩むことのない緊張感、めまぐるしく変転する喜怒哀楽。その果てに、嵐のような大団円を迎える。この楽章についてピョートルは、「民衆の祭りの日の描写」という言葉を残している。祭りの日に、その喜びを民衆と共にすることができるか。その一体感を味わうことができるか、どうかである。

「あなたが自分自身の中に歓喜を見出せなかったら、ほかの人々をごらんなさい。民衆の中に入りなさい。民衆がどんなに生を楽しみ、歓びの感情に浸っているかをご覧なさい」

全体としては、明らかに、

自分を押し潰そうとするものに抵抗し、

逆巻き、燃え上がる創作意欲の発露がここにはある。

「花の絵」より

これはチャイコフスキーが己の全存在を賭して書いた、彼の作品中でも屈指の力作である。「これまで自分の作品で、こんなに苦心したことはありませんが、これほどの愛情を感じたこともありません」という言葉も、そのことを裏付けている。

参考：「花の絵」http://www.hananoe.jp/classical/gakunomori/gakunomori052.html

第４番 その２　無用の用

現役を去ってペンション・ライフ（年金生活）を始めたMは、日本中の後輩達にお世話になるという負い目を棚に飾りながら、何かをしなければと自問自答している。残りすくない人生でも目標を立てなければと焦って、また昔のように悶えている今日この頃だが。人はいつまで迷うのだろう。

あの自信の**鳥**は逃げ出してしまったのか。痛々しい時代を吐露してしまったからなのか。

いや違う、人は健康で生きているかぎり何かをして僅かでも社会の支えにならなければ、生の謳歌はできないはず。自由ゆえの義務ではなく、どこまでいっても人として義務をはたしての自由でなければ、胸にいるはずの**鳥**はきっと消えていってしまう。

一方、夢は歳に反比例する。馬鹿らしくなる。Mの周りにもそういった頑なというか解ろうとしない凡人が少なからずいて時に流されている。しかし、生きる力でもある**「鳥」**は、歳に応じてそれだけの夢を抱く努力を払わなければ枯れて行くだけであろう。

かろうじて、司馬遼太郎を凌駕しそうな作家：宮城谷昌光氏に感服し、彼の作品である中国の春秋戦国時代（BC770年～BC221年）の小説を片っ端から読んできた。いまは新作発売を口を開けて待っている。その彼が、中国古代の賢者：老子の教えをいくつか告げていた。その一つが

「無用の用」

であるが、これは奇を衒う（誇張する）だけじゃないか。人間の直ぐな感覚の裏をついているだけではないか。人を惑わしている、と思ったが。

若い時からどっぷりと漬かったクラシック鑑賞は、確かに大学卒業という本道では「無用」だった。でも、挫折したときに見事に「用」を足してくれたのである。趣味道でカラヤンのチャイコフスキーの交響曲第４番に出会わなければ、再起エンジンは発動しなかったはずである。

夢も目前のことには無用となる。

この年になって名言を噛みしめている。

**********<https://manapedia.jp/text/3877> **********

老 子『無 用 之 用 』

ここでは老子『大道廃有仁義』ここでは中国の思想家老子が著したとされる「老子（老子道徳経）」の中の『無用の用・無用之用』の書き下し文、現代語訳（口語訳）とその解説を行っている。

原文（白文）	書き下し文
三十輻共一轂。	三十の輻（ふく）は一轂(いっこく)を共にす。

当其無、有車之用。	其の無に当たりて、車の用あり。
埏埴以為器。	埴(しょく)を埏(せん)して以て器を為(つく)る。
当其無、有器之用。	其の無に当たりて、器の用あり。
鑿戸牖以為室。	戸牖(こいう)を鑿(うがち)て以て室を為る。
当其無、有室之用。	其の無に当たりて、室の用有り。
故有之以為利、無之以為用。	故に有の以て利を為すは、無の以て用を為せばなり。

単語解説

輻	車輪の中心部から輪に向かって放射状に出ている棒:スポーク
轂	車輪の中央の太い部分
埴	粘土
埏	こねる、やわらかくする
鑿	突き通す、貫く
戸牖	戸や窓

現代語訳(口語訳)

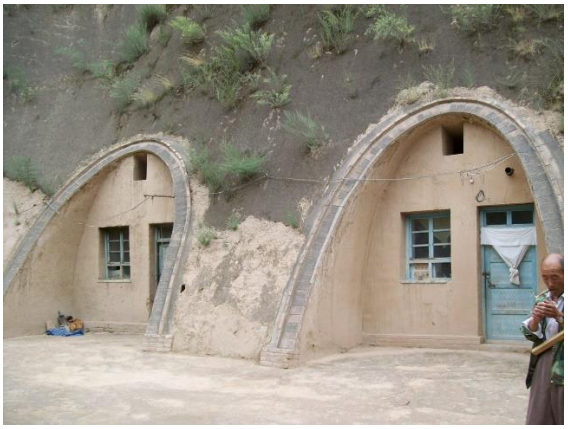
30本の輻は1つのこしきに集まって(車輪を形成して)いる。
そこに何もない空間があるから、車輪としての役割を果たす。

https://goods.ruten.com.tw/item/show?21812787735449

粘土をこねて器を作る。
そこ(器の中)に何もない空間があるから、器としての役割を果たす。

戸や窓を貫いて部屋を作る。
そこ(部屋の中)に何もない空間があるから、部屋としての役割を果たす。

https://www.kochi-maibun.jp/center_collection_detail11.html



中国・黄土高原の窰洞(ヤオトン)

https://4travel.jp/travelogue/10262540

つまり形ある物の価値があるのは、形のないもの「空間」がその役割を果たしているからである。

〈https://ja.wikipedia.org/wiki/老子〉 **********

老子は、中国春秋時代における哲学者である。諸子百家のうちの道家は彼の思想を基礎とするものであり、また、後に生まれた道教は彼を始祖に置く。「老子」の呼び名は「偉大な人物」を意味する尊称と考えられている。書物『老子』(またの名を『老子道徳経』)を書いたとされるがその履歴については不明な部分が多く、実在が疑問視されたり、生きた時代について激しい議論が行われたりする。道教のほとんどの宗派にて老子は神格として崇拝され、三清の一人である太上老君の神名を持つ。

これは、まさに、アインシュタインが「時空」と定義した宇宙空間に相当する。そこに何もない用無しスペースがあるから、天の川銀河、太陽系が生まれ、地球が存在する。究極的には、意味ないと見えるものが意味を持つのである。老子がいう空間という一見用無しの隙間(すきま)は、宇宙には果てしなく広がる時空であって、しかもそのスペースは宇宙全体に拡がっている。それを有意義極まりない一般相対論方程式でアインシュタインは記述したのだ。老子の言うスペースは、実は、物理的にも意味が大いにあったのである。

老子は一見用無しの空間でも用を足す場合が多いにあることを諭(さと)している。これは、いろんなケースに当てはまる。

傍(はた)から見れば用無しである趣味でも用足しになる時もあるということだ。私の事例では、勉学に貴重な時間に、女友達との交際にも必要な時間に、寝転がってクラシックを聴いている時間は、その時には、無用以上に時間の無駄使いでしかない。しかし、音楽鑑賞による情緒感覚の育成とともに、「第４番との遭遇」という事態に発展し、私の人生を矯正してしまった。

ほかに、たとえば、誰も注目してくれない下手(へた)な編物や刺繍に興をおぼえて、時間があればそれにいそしみ、いつまでもそれを止めない女性が、やがて、老いてから認知症という厄災に見まわれずに済むのである。私の祖母がそれだった。古着のボロをつくろって下手くそに雑巾を死ぬまで縫っていた祖母は、誰からも褒められなくても、延々と続けたからボケずに済んだ。

手指の運動は、大脳の活性化に直結すると言われている。なぜ、猿から人間が進化したのか、を問えば明らかである。

ちなみに、私は下手ながらも、この巡礼と共に延々とパソコンをいじっている。

佳 曲

１８８０年の秋、ピョートルはカーメンカで、序曲「１８１２年 0p. 49」と同時に、現在まで人気が絶えない

弦楽セレナード Op.48 1880年 40歳

を作曲した。この名曲は、クラシック・ポピュラーの定番であり、ＢＧＭにおける採用頻度は飛び抜けている。

前者は１８８１年３月１日に皇帝アレクサンドル２世が暗殺されて博覧会が１年延期になり、初演は１８８２年８月８日になる。またその間にニコライ・ルビンシテインが、パリで客死した（1882年３月11日）。初演の指揮者はアリターニであった。後者のセレナードは１８８１年１０月にナプラーヴニクによってサンクトペテルブルクで初演された。

そして、ニコライの急逝を悼(いた)んで、次の名曲が捧げられた。

ピアノ三重奏曲“偉大な芸術家の思い出”0p. 50 1882年 42歳

召使いが１８８０年から兵役に取られ、一人暮らしに耐えなければならなかった。定住していなかったピョートルは、１８８５年２月にモスクワ西北約８０キロのマイダノヴォ村に別荘を借りて、１８８８年４月まで住居とした。モスクワとサンクトペテルブルグ間の幹線道路沿いにあるので、そこから彼の重要な活躍の場である両都市に出向くという生活が展開された。

マイダノヴォでの生活は、朝７時から８時に起床、朝のお茶の後しばらく英語の勉強、あるいは読書で過ごした。夏には夕食前に友人などと散歩した。秋や冬にはピアノを弾いた。夕食後１１時までヴィントのゲームや読書、あるいは手紙を書いた。この生活リズムは厳格に死ぬまで守られる。

バラキレフから提案されていたバイロンの“マンフレード”による標題交響曲を作曲する。

交響曲“マンフレード” Op.58 1885年 45歳

この交響曲は第何番と付されていないから、彼は劇付随音楽のように考えていたのかもしれない。聴いてみると、さすがにピョートルらしく劇的であり、本来なら朗読などを挟んで演奏されるべきであろうか。音楽だけでは情景が浮かばず、散漫な印象を受けるので、交響曲としては物足りない。ベルリオーズの幻想交響曲には、楽章ごとに台本がついていて観客に配られ、情景の説明がなされていたという。そこまでやるという演出家がいなかったのだろう。

この時期には、モスクワでは音楽協会の理事、モスクワ音楽院の試験官、サンクトペテルブルクでも室内楽協会会員に選ばれ、多忙を極める。

ピョートルは、ティフリスから黒海沿岸の町バトゥーミに出て船に乗り、黒海南岸のトルコを海岸沿いに旅をして、地中海からマルセーユに上陸してパリに行った。パリには１ヶ月足らず滞在し、パリに住んでいるゴリツィン公爵を６月に訪問している。

家に帰ってまもなくして、忘れていた厄病神：妻アントニーナの手紙を受け取って、再び苦悩の日々を迎える。あれから９年経った彼女は、３人の私生児を生み、孤児院に入れていた。彼女は精神に異常をきたし、復縁を迫ってきた。しかし、彼女には同棲している相手もいた。ピョートルはユルゲンソンを通して金銭的に解決する。この後も、彼女は手紙で彼を悩ますが、ユルゲンソンがすべて処理をした。

第５番

クラシック巡礼の旅　「ロシアの風景」

2010.1.17　2019.8.11改　別当 勉

暗鬱たることロシアの森の如く、　＜第１楽章＞
燦然たることロシア平原の暁の如く、　＜第２楽章＞
不安なること溶けたシベリア凍土の如く、　＜第３楽章＞
流麗なることヴォルガの奔流の如し。　＜第４楽章＞

写真の世界では、「北の色」というカラー発色があるらしい。そういえば、シベリアとかノルウェイで撮った映画では青っぽくなることが思い出された。今は、フィルムに代わって高解像度のディジタル映像処理技術が実現されたから、この特徴はある意味で消えつつある。カラー調整が出来るためロケーションの背景もコントロールされてしまうことである。

ピョートルの交響曲**第５番**が、この「北の色」を感じさせてくれる。すなわち、ロシアの風景の重要な部分である。

しかし、琥珀色の美しいシンフォニーは、暗澹たるフィンランドの作曲家シベリウスとは違って、浪漫の地熱がベースになっているから、重厚な雰囲気に輝いている。第６番の「悲愴」に隠れて第５番は地味ではあるが、それ故になおさらに愛おしい。正に、チャイコフスキー・アイデンティティが結晶した隠れたる名曲であろう。

やはり、朝靄のかすんだ寒い遥かな大地に響くホルンのむせぶような優しい響きに目が覚める、という感動を一番に挙げなければならない。第２楽章のイントロである。これで、行ったこともないロシアの貴重な優しい風景に出会えると言っても過言ではないだろうか。まるで、名匠デビッド・リーン監督の映画「ドクトル・ジバゴ」の満面黄色の花畑シーンの穏やかな季節到来にうっとりするような感じだ。

それから第４楽章は、１９５０年代にストコフスキーという指揮者が出演した映画「オーケストラの少女」で採用されて有名になった。ストコフスキーとは、ディズニーのアニメ「ファンタジア」の音楽担当を行うなど、クラシック普及にも貢献した大指揮者である。この指揮者の十八番が、本題の**第５番**であった。

曲の進行は、暗く蠢くファゴットのイントロから始まるが、これは楽章に共通のモチーフであり、続いて第一主題もファゴットで現れる。この主題がやがて張り裂けんばかりにブラスの咆哮で増幅されるのが第１楽章であり気分は昂ぶる。それを忘れたように、夢のような綿飴のホルンが奏でる第２楽章の抒情となるが、木管の響きも加わり何度聴いても心地よい。第３楽章は、不安定なワルツの弦のユニゾンに気分が変わる。

一転して、第４楽章は大河の奔流のようで圧倒される。第１楽章から続く「共通モチーフ」が最大限に変奏され、ヴォルガのようにうねって海にそそぐように発散していく。この共通モチーフ（動機）は、それぞれの楽章に埋め込まれているが、その手法はうますぎて気づきにくい。同様の構成法は、ベルリオーズの幻想交響曲でも採用されていたが、曲想との関係ではピョートルの方がより馴染みが良いかもしれない。

この交響曲第５番 ホ短調 作品６４は、ピョートルのいわば『傑作の森』に当たる４０代最後の１８８９年に出現する。言ってみれば、彼の際立ったインスピレーションと才能のすべてがこの期間に結集する黄金期でもある。

１８８７年の暮れからヨーロッパでも指揮者として活躍し始めた。ライプツィヒのゲヴァントハウスから始まるこの演奏旅行で、多くの音楽家と知り合う。ブラームス、グリーグ、R.シュトラウス、マーラー、さらにプラハではドヴォルザーク、パリではグノー、マスネとも出会う。４ヶ月の長い演奏旅行を終え、フロロスコエの新しい家に帰る。フロロスコエは、クリンに近く、マイダノヴォからも遠くない。今度の家は建物も庭も景色もよく、ピョートルは大いに満足した（1888年５月）という。

1888年(48歳)

参考：http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html

交響曲第5番 ホ短調 Op.64　１８８９年（４９歳）

ピョートルの交響曲の中では，後期３大交響曲である第４番、第５番、第６番の人気は極端に高く，その中でも最もよく演奏されているのがこの第５番である。ピョートル自身，初演時には，この作品のことを「大げさで不誠実」と評して謙遜していた。しかしながら、暗から明へという分かりやすい構成，周期的に出てくる運命のモチーフ，次々と出てくる魅力的なメロディーなどの力もあり聴衆の人気は大変高く，彼自身も次第に自信を深めたようだ。

曲は，それぞれ個性的で魅力的な４つの楽章から成っている。その４つの楽章を通じて出てくるのが，第１楽章冒頭の「運命のモチーフ」である。様々に形を変えながら随所に登場する様は，ベルリオーズの幻想交響曲と軌を一にするところがある。楽章の１つがワルツになっている点も共通しており、ピョートル自身，ベルリオーズの《幻想交響曲》を意識して作曲していた可能性もあるらしい。

第１楽章

序奏とソナタ形式（提示部→展開部→再現部）。上述のとおり，冒頭でクラリネットが暗くひっそりと演奏する「運命のモチーフ」が４つの楽章を通じて姿を変えて何度も顔を出し，全曲を統一するという，循環形式になっている。第4番の冒頭の主題も「運命のモチーフ」と呼ばれているが，いろいろな表情を見せてくれる。

第１楽章の提示部はクラリネットでゆったりと提示された後，次第に虚無的な雰囲気になっていく。それに逆らうように始まるのが第１主題です。この主題は，軽く弾むリズムの上にクラリネットとファゴットのオクターブで演奏される。続いてニ長調の第２主題が出て、穏やかでロマンティックな気分が広がり，「これぞロマン派の交響曲だ」という感じになる。

展開部では，第１主題のモチーフを執拗に繰り返して、全体を華麗に盛り上げていく。

再現部は第１主題がファゴットソロで演奏された後，提示部とほとんど同じ形で繰り返される。最後は，前に進む足取りを止めて，コントラバスの最低音に沈み込んで静かに終わる。

第２楽章

複合３部形式。８／１２，ニ長調。弦楽器による静かな導入部に続いて，ピョートルの書いた多くの旋律の中でも特に名品と言われる主題がホルン独奏で出てくる。翳りと憧れを含んだ，息の長い甘美な歌である。これは、《眠れる森の美女》の第２幕“パ・ダクシオン”に用いられた旋律の発展形のように聴こえる。

「ドクトル・ジバゴ」における花畑シーン
革命により荒廃したモスクワを捨てたジバゴ一家は、
ウクライナの別荘に隠れ住んだ。別荘の花畑に立つジバゴ。

http://lacedaemonian26.rssing.com/chan-14011888/all_p83.html

このホルンがクラリネットの低音と親密な言葉を交わした後，オーボエにメロディーを渡し，ホルンはオブリガードに回ります。その副主題もはかなく甘美なもの。

中間部はクラリネットによる孤独なメロディーで始まる。ここでは嬰ハ短調になり，拍子も４／４になる。心を揺さぶるような９連符が印象的。このメロディーが他の楽器に広がってクライマックスを作った後，突如，嘲笑うかのように運命の主題が最強音で暴力的に出てくる。

これが終わった後，再現部になります。再現部では第１部とは違ったオーケストレーションがされています。第1部同様大きく盛り上がった後，コーダで再度「運命のモチーフ」が最強音で出てきた後，クラリネットの弱奏で静かに閉じられる。

第３楽章

ピョートルは，３大バレエのそれぞれの中で有名なワルツを作っているが，この楽章はそれらと比肩されるワルツであろうか。ワルツを得意とするピョートルならではのアイデアと言えるが，上述のとおりベルリオーズ『幻想交響曲』におけるワルツの影響を受けている可能性もある。

夢見るような艶やかさを持つワルツ主題と中間部でのバレエ音楽を思わせるような小刻みなリズムの動きとの対比が聴きもの。ただし，この楽章には優美だけれども，精神的に落ち着かない不安な気分もある。

第４楽章

序奏付きのロンド・ソナタ形式。楽章の最初，「運命のモチーフ」がマエストーソの指示どおり弦楽合奏で威風堂々となされる。前楽章の最後にも「運命のモチーフ」が出

てきたばかりだが、ここで出てくる「運命モチーフ」はホ長調になっている。楽章の明るい結末を予測させるよう。弦楽合奏の後は，弦楽器がオブリガートとなり，管楽器の合奏で主題が演奏される。

第２主題は細かいリズムの刻みの上に乗って，管楽器で演奏される。高揚する気持ちが湧き上がるように展開した後，金管楽器が「運命のモチーフ」を明るく演奏して展開部に入っていく。

第１主題，第２主題に基づく荒々しい熱っぽい展開の後，再現部となる。型どおり再現された後，金管楽器のファンファーレ，ティンパニの連打と続き，一旦全休止。これで壮大なクライマックスに入る準備が整う。

コーダは，少々取って付けたように始まりますが，有無を言わさぬ圧倒的な迫力を持った部分。悠然たる伴奏音型の上に，待ってましたとばかりに弦楽器群が長調になった「運命の主題」を朗々と演奏します。最初は金管楽器が合いの手を入れているが，その後は，金管楽器が主題を引き継ぎ，輝かしさを増す。最後はテンポを速めて，絢爛豪華な感じをさらに増し，金管楽器による第１楽章第１主題がこちらも長調に変形されて割り込んでくる。最後の最後の部分は，運命に打ち勝ったように、力強く全曲が締めくくられる。

参考：　http://www.oekfan.com/note/tchaikovsky/sym5.htm

この曲は、１ヶ月程で完成する。年末にはバレエ曲

眠れる森の美女 Op.66　1889年完成 49歳

を手がけ、１８９０年１月３日サンクトペテルブルクのマリインスキー劇場で初演した。賛否両論あったが、大成功であった。

https://matome.naver.jp/odai/2140860145929002101

引き続き、

くるみ割り人形 Op.71　1892年完成 52歳

の注文を受ける。初演は１８９２年１２月。詳細は後述。

メック夫人との別離

１８９０年９月、ピョートルがティフリスの弟アナトーリイの所に滞在していた時、メック夫人から１４年も続いた年金の打切りと「別れ」の通告書簡が届く。さすがにピョートルは愕然とした。経済的支援と心の友が一挙に失われるのである。現在、この最後のメック夫人の手紙は残っていない。ピョートルがメック夫人やパフーリスキー（夫人お抱えのヴァイオリニスト）に送った手紙は残っている。どうも、鉄道会社経営の行き詰りに加えて、息子たちからの作曲家援助における濫費について、苦情があったようだ。

また、メック夫人がお抱えで支援していたドビュッシーへの鞍替えではないかという噂も絶えないが、違うようである。ドビュッシーとチャイコフスキーの音楽を芸術性や感銘度、スケール感において比べる人は、メック夫人はもとより、今でもまずいない。ドビュッシーは、音楽のスペクトル（色相）が、赤橙黄緑青藍紫という七色の可視域にて紫外線の方にズレているから。メック夫人の経費削減という命題上、ピョートルより安いドビュッシーに絞ったのかもしれない。

ピョートルからメック夫人への手紙（1890年９月22日）

もちろん私だって、このような急激な収入の減少が、私の物質的安定にまったく影響を与えないと言ったら嘘をついていることになります。・・・・・・（略）・・・・・・誰も私以上には、あなたの全ての不幸な出来事を、共に悲しみ分かちあっているものはいないことを、永遠に覚えておいて下さい。

ピョートルからパフーリスキーへの手紙（1891年６月６日）

昨年九月にN.F.（メック夫人）が私に、破産したのでこれ以上物質的な援助はできないと告げられました。私の返事はおそらくあなたもご存じでしょう。私は彼女からお金を貰わなくなっても、私とN.F.との関係が少しも変わらないことを望みましたし、私にとってはそうでなくてはならなかったのです。

パ・ド・ドゥ

クラシック巡礼の旅　「センチメンタル」

2009.12.30　2019.8.17改　別当 勉

ピョートルという寒い大地に行ってみよう。といえば、如何に凍土を溶かすほどのロシアの熱い想いに辿りつけるかが課題である。誰しも、《悲愴》のあの香しい旋律にとり憑かれるだろう。あるいは、ヴァイオリン協奏曲かピアノ協奏曲に囚われる。それぞれ、語り尽くせないほどの深淵の美があり、初心者も含めてファンは多い。

しかしながら、三大バレエ全曲を踏破する勇気ある人は少ないと思う。センチメンタルの甘さに、ゴディバの食べ過ぎみたいに飽き飽きとするからである。でも、この三つを聴き尽くさなければ、チャイコフスキー・センチメンタリズムの真髄には触れられない。

僕が高校生の時、嫁に行った姉のステレオで初めて聴いたアンセルメの「白鳥の湖の情景」には、その美麗さと甘い感触に胸が震えた。ハープに誘導されるオーボエの染み入るような嘆きには、ロシアの暗さが香って何度聴いても参った覚えがある。いつもオーケストラの真ん中辺に置き去りにされてきたオーボエが、美麗かぎりないオデット姫を舞わせ、この時ばかりと活躍する。

そう、ピョートルは木管楽器、特にオーボエがこよなく好きなのである。しかしてロシア的センチメンタルの極致が演じられる。そして数年経って、なけなしの大枚をはたいて「くるみ割り人形」全曲盤を買ってしまった。さあ大変だ。まだ、ワーグナーの長大な魔曲も知らない汚れ無き青年だったから。

何度きいただろうか、いつもの居眠りも冗談でなく、睡魔に妥協することだらしない。しかし、性根が執拗だから、夢想的で美しい第２幕「情景」から、チェレスタによる可愛いコンペイ糖の躍りの場面などでは、しっかりと目が覚めているが、七転び八起きのダルマのように聴いている始末で、恥ずかしい。そして、あの有名な「花のワルツ」である。これは、途中で転調する変移がなんとも言えないほど気分が良い。

ようやく静かに、**パ・ドゥ・ドゥ**（Pas de deu）という男女の主演ダンサーのデュエットが始まる。パ・ドゥ・ドゥとはクラシック・バレエの本場であるフランスの言葉であるが、英語直訳では《Dance of two》である。古典バレエの常套である盛り上がりのために導入されてきた。いわば観客への大サービスであり、また、観客がその出来上りに期待して見逃さないパートなのだ。

イントロが夢のようなハープの優しく高雅なトレモロにうっとりして誘われるように、弦楽が甘美な旋律を唄う。《悲愴》の主題に似ているが、実は《悲愴》作曲前の作品なので発展的

原型でもあったと言われている。ただし、《悲愴》ではヴァイオリンにミュートを付けたから、何とも言えない魅惑的な絹摺れの音になっている。作曲家の魔術はこの辺に潜んでいるのであろうか。

そして、この物悲しいストリングス・ユニゾンで気分は雲の上に浮きあがってしまい、次第に切々さが昂じてくる。続いて、つつましくオーボエが恋歌を奏で始める。そうすると、ファゴットが優しく包むようにバリトンでこたえるのだ。正に、木管楽器の琥珀色の美しさ、ロシア色そのままと言いたい。この絡み合いは、オーボエがバレリーナ：クララを表し、ファゴットがバレエリーノ：王子を模して、究極のラブ・ロマンスを彷彿とさせられ、聴きごたえ充分である。センチメンタルを遥かに超えて、相愛が昇華するようにすさまじい盛り上がりをみせる。ダンサーとしても躍り甲斐が極るであろうことは、想像に難くない。情熱的な感傷と言えばいいのだろうか、筆舌に尽くし難い。

ここまで聴き込んで来て初めてピョートルの甘美さに感銘したのだから、いい加減に批評できない。

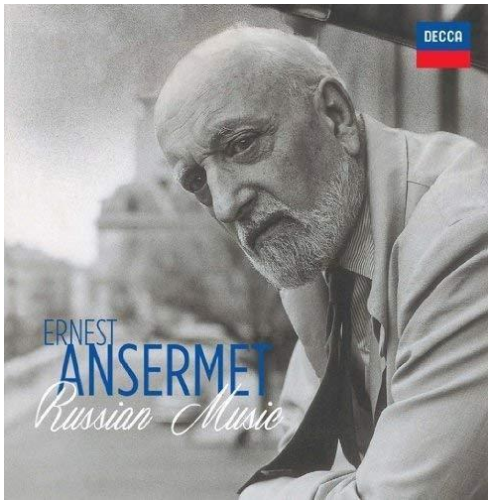
さて、僕は７０歳を超えても、ほのぼのとした甘い感傷に酔えるのはどうしたものか。

という感慨は逆で、それほどの名曲だから年齢層に関係が無いのである、というべきだ。

僕の語りは”Sleeping Beauty”まで至っていない。これは子供たちとも楽しめるディズニーの同名アニメが、ほぼ全曲をカバーしており、絵が綺麗で雅さも際立っているので、先ずはそこから入るのが一番である。

エルネスト・アンセルメ（1883-1969年）

私の推薦盤は、３曲とも、昔ながらのエルネスト・アンセルメ盤である。１９５７年のステレオ初期の録音であるが、英デッカの惜しみない録音技術が投入されており、今でも聴き劣りがしないほど、プレゼンスとソノリティ豊かな音に仕上がっている。



https://www.amazon.co.jp/エルネスト・アンセルメ・デッカ・レコーディングス-ロシア音楽録音集-1946-1968-エルネスト・アンセルメ/dp/B00J498SOI

なお、チャイコフスキー編による「くるみ割り人形組曲」アルバムは一般的であるが、花のワルツで終わってしまうから留意されたい。アンセルメは、スイス・ロマンド管弦楽団を率いて、晩年は、ベートーヴェンとかブラームスとかは勿論、交響曲も協奏曲も対象外として、世界的に活躍した名

指揮者である。後半生のレパートリィは、交響詩、舞踊曲、狂詩曲（ラプソディ）、変奏曲、序曲、その他の小曲であり、意外に日の当らないものを積極的に演奏した反骨が窺(うかが)える。現在、それを踏襲(とうしゅう)している指揮者は、第一にシャルル・デュトワが挙げられよう。バックハウスもそうだったように、昔は一徹(いってつ)が多かった。専門領域では、他を引き離して身を焼き尽くすほど執心(しゅうしん)したのであるから、絶対的名演が生まれたのだ。

くるみ割り人形　経緯

「くるみ割り人形」は、「白鳥の湖」「眠りの森の美女」とともに、３大バレエ音楽として、あまりにも有名である。１８９０年、マリインスキー皇帝劇場の支配人フセヴォロジスキーは、新たにバレエ音楽を作曲するようチャイコフスキーに依頼した。バレエの題材はドイツ・ロマン主義作家であるＥ．Ｔ．Ａ．ホフマン原作の「くるみ割り人形と二十日ねずみの王様」だが、バレエ制作の原典はデュマのフランス語版「くるみ割り人形」をもとに振付師プティパがまとめた台本である。

この時期は長年の文通と経済的支援でピョートルを支えてきたメック夫人との突然の別離で精神的に不安定な状態にあった。チャイコフスキー自身も「くるみ割り人形」の童話を読んではいたものの、童話はバレエに向かないと考えていた。しかし、プティパの台本を読んでみると、場面の音楽について細かい指示もあり、ホフマンの原作がバレエに巧妙にまとめ直されていた。気乗りしないものの、帝室劇場への篤い義理もありこの依頼を引き受けることにした。

ニューヨークに向けてカーネギーホールの柿(こけら)落し演奏旅行など多忙な毎日を送るなか、１８９１年７月に草稿を完成し、１８９２年２月からオーケストレーションに着手した。この頃ロシア音楽協会から新作の演奏会を急に依頼されたが、新作を手がける時間もなく、作曲中のバレエ「くるみ割り人形」から８曲を選んで、組曲「くるみ割り人形」作品７１ａとしてバレエより先に発表することにした。この組曲の初演は１８９２年３月に行われ大成功であった。

バレエ「くるみ割り人形」の初演は１８９２年 12 月 19 日、ペテルブルグのマリインスキー皇帝劇場にて行われたが、急病に倒れたプティパに変わって弟子のイワーノフが一部台本を改訂して振り付けを行ない、このバレエ初演は不評であった。しかしながら、聴衆はチャイコフスキーの美しい音楽には惜しみない拍手を送った。

参考：藤井章太郎(フルート) http://www.shinkyo.com/concerts/p187-1.html

バレエ音楽「くるみ割り人形」op.71 1892年 52歳

チャイコフスキーの作曲した三つのバレエ音楽は，それぞれに，特色を持った名作で、現在でも，世界中のバレエ団の基本的なレパートリーとして、あきれるほど上演されてきている。これらのバレエがずば抜けた人気を誇っているのは，何といってもピョートル音楽が甘美で壮麗だから、舞台エンターテインメントとして最高の位置を占めてきている。

三大バレエの中でも「くるみ割り人形」は、いちばん上演時間が短くても、ピョートルの熟成した最高のオーケストレーションが展開され、内容的にもメルヘン的な雰囲気を持っている。チェレスタや少年合唱の使用などサウンドの点でもオリジナリティ溢れるものになっている。

ホフマンの童話「くるみ割り人形とねずみの王様」に基づき、チャイコフスキーが作曲して完成したバレエが「くるみ割り人形」です。物語の舞台はクリスマス・イブの夜。王子(くるみ割り人形)とともに、クララはおとぎの国へと旅立ちます。ソリストとコールド・バレエのダイナミックかつ美しい踊りは目を奪われる！

https://www.enjoytokyo.jp/feature/pr/koransha/?_ngt_=TT0feb8cecb003ac1e4a59ccKTWoKNyIqYQZqscIt87Fzt

「くるみ割り人形」の物語は，ドイツの作家 E.T.A.ホフマンの童話に基づく。これを，マリインスキー劇場の首席振付師のプティパがバレエに構成している。プティパは，細かな注文をつけて、ピョートルはその要求に応え，バレエ史に残る不滅の作品を残した。

このバレエは，クリスマスの夜のお話であるので，クリスマス・シーズンに上演される。

《あらすじ》

クリスマス・ツリーのある居間での楽しげなシーンからバレエは始まる。人形使いのドロッセルマイヤーがいろいろな人形を出す。最後に「くるみ割り人形」が登場。他の子供は嫌うが，主人公の娘クララはとても気に入る。パーティがお開きになった後の夜更け，ねずみの大軍とくるみ割り人形率いる鉛の兵隊が戦う。戦いが終わり，ねずみ軍が引き上げると，くるみ割り人形は，王子に変身し，クララもレディになる。

この後，2人は手に手を取っておとぎの国へ向かう。おとぎの国では祝宴となり，各国の民族舞踊などが踊られる（ディヴェルティスマン）。最後にクララと王子による，

グラン・パ・ド・ドゥ

が踊られる。

https://www.classica-jp.com/column/6660/

一転して，クララの部屋に戻る。おとぎの国の祝宴はすべて夢だったとわかり，クララはくるみ割り人形を抱きしめる。

このバレエには，子供でも楽しめるようなシーンが沢山あるが，クラシック・バレエの最大の見せ場であるグラン・パ・ド・ドゥがなかなか出てこないので，初演では予想外の不評にな

ったようだ。その後，徐々に真価が認められるようになったが，振付については，いまだに決定版がなく，試行錯誤が続いているとのこと。そういう意味で，このバレエは，**チャイコフスキー音楽の魅力**の方が大きい作品と言える。

http://www.oekfan.com/note/tchaikovsky/nutcracker.htm

問題は、オペラと同様に「舞台か音楽か」それとも「音楽か舞台か」である。ピョートルは台本に沿って作曲したのであるが、当時は舞台が従(つ)いてこなかったという不運があった。それでも、死後、現在まで世界中の舞台演出家とバレエ踊り子の熾烈な教練により、美しいバレエが出来上がったのである。それもこれも、ピョートルの舞曲があって、周りを引き摺り込み、数多(あまた)の舞踊団のバレリーナを必死にさせるほどである。三大バレエの主役を演じるために、涙ぐましいほど血みどろの鍛錬を、彼女たちに当然のように強いてきた。

『白鳥の湖』のオデット姫、

『眠れる森の美女』のオーロラ姫、

『くるみ割り人形』のクララ姫

という夢のような美形の主人公にどうしてもなりたかったのである。やはり、

「チャイコフスキー音楽あっての舞台」

であることは、文句のつけようがない。

いまだに彼は、バレリーナらは勿論のこと、大勢の観客および聴取者に夢を与え続けている。

第６番《悲愴》

第１楽章を除けば、真に陶酔できる楽章は無いとも言える。飛び抜けた人気もこの第１楽章所以（ゆえん）となろう。しかも濃密で起伏は激しく、次のとおり四節で見事に構成されている。

第１節　暗鬱：　ファゴットにより暗い深海に落ち込んでいくが、ストリングスが水泡のようにやかましく湧いて浮上していく。

第２節　飛天：　暗鬱な麻酔薬が切れるように、あの世に飛び交う艶（なま）めかしい半裸の飛天たちが現れ、美しい蜃気楼の弱音ヴァイオリンの哀愁にのって浮かび上がる。まさにミューズの化身であり、耳は奪われ、息を呑む。これが繰り返され、最後はクラリネットが締めくくる。完璧に全身麻痺する。

喜多郎：アルバム「敦煌」ジャケット　長岡秀星作イラストによる飛天

https://www.amazon.co.jp/NHK特集-シルクロード-オリジナル・サウンドトラック-敦煌-喜多郎/dp/B00006G8VZ

第３節　雷鳴：　陶酔の甘さを破るように、突然の雷鳴が轟き、その強烈な衝撃で耳の鼓膜が粉砕される。天道の神々の怒りであろうか。

第４節　紺碧：　雷雨後にどこからともなく、あの麗しい蜃気楼の飛天らが、紺碧の天空に明るい長調で舞い上がる。なぜか、地上はおきざりにされたように感じる。

若い時の私の問題は、《悲愴》が４楽章全体にわたり整理できないことであった。第１楽章いがい、作曲家のインスピレーションが物足りない。何を訴えたいのか、何を嘆いているのか、解らない。ただ、第１楽章だけが強烈に響いてくる。１９歳だった若造としては、とにかくＦＭで聴いた第１楽章の《悲愴》の旋律だけでもその媚薬(びやく)に痺(しび)れながら、どっぷりと聴き込みたかった。図らずも、１９６６年当時、ピエール・モントゥー（1875-1964）のＬＰが出て雑誌で評判だったから、空腹をさておいて買ってしまった。そのレコードは強烈な印象だったが、第２楽章以降は付け足しのよう。いまだにそう思う。

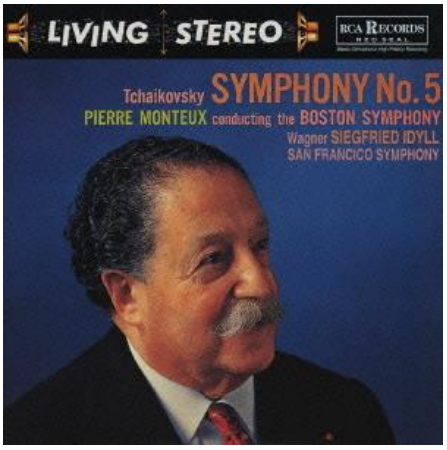
それから４０年ほど経ってこの巡礼を始めたが、すでにマイ・オーディオ・システムはＣＤ専用になってしまっている。しかしながら、恋しさが消えないモントゥー盤のディジタル変換ＣＤが、どこ探しても見当たらない。それまではカラヤン盤４種も、ムラヴィンスキー盤ＳＡＣＤも、つい最近のカレンティス盤も手に入れて聴いたが、私の耳には物足りない。ムシャクシャしてどうにも晴れてこない。１９歳の感動は脳髄から消滅してくれない。

この拘(こだわ)りはマニアの決定的な禁断症状でもある。よく、フルトヴェングラーのモノラル録音を持ち出して賛美して止まない年寄りの評論家が、昔は多かった。私は、ステレオ育ちだから、それらは門前払いしてきた。でも、どうしてあの古臭い録音に拘るのかようやく納得がいった。モノラルしかない時に、多感な青年期を過ごした老評論家たちは、最初に聴いて刷り込まれた名(?)録音のモノラルにどうしても拘ってしまった。

ただし、作家の佐藤春夫や五味康祐のようにステレオにゾッコンだった金持ちフリークたちは、やはりモノラルには見向きもしないことを忘れてはいけない。モノラルの名演奏は私にも意味が無いのである。加えて、音質が極端に悪いのに、ＬＰレコードはモノラルでも高価だったから、安月給の評論家があれもこれも名指揮者の録音を比較試聴できなかった。それなのに、よくも名(?)演奏と言えたものだ。とも言いたい。この時代では、ステレオ以前に７８回転のＳＰから３３回転のＬＰに発展した技術革新も見逃せない。演奏時間が５０分にもなる交響曲は１枚のＬＰに収まるが、ＳＰだとおそらく４枚から５枚ほどになる。レコードのかけ替え操作だけでもウンザリする。

こういった私の病的執拗さが、ようやく実った。諦めずにインターネットで中古ＣＤを何度も漁(あさ)った結果、モントゥー盤ＳＡＣＤに出くわしたのだ。この嬉しさは喩(たと)えようもない。拘(こだわ)り症候群のマニアなら分かるはず。

ピエール・モントゥーの『悲愴』録音



ピエール・モントゥー
http://www.neowing.co.jp/product/BVCC-37167

ＡＴ＆Ｔの子会社ウェスタン・エレクトリックがステレオ・レコードを発明したのが１９５６年であり、モントゥーのものは、その直前の１９５５年の録音であるから、まだモノラルしか出来ない。

ところが、ＲＣＡは、３トラックのプロ用のアンペックス製テープ・レコーダーでオリジナルを録った。つまり左右のマイクと中央マイク三本で収音したものである。ＲＣＡが２トラックのテープにダウン・マスタリングして、家庭用のステレオ・テープ・レコーダー向けに発売したのであった。この録音が、ダイナミックレンジ、ソノリティ、プレゼンス、周波数帯域など全ての特性が、１００年以上も精彩を失わないほど優れていた。１年ほどして間を置かずに、ステレオ・レコードになったのである。

そのマスター・テープから、ようやく日本ビクターがカッティングして、１９６６年にステレオ・レコードとして発売し、それを私は買って聴いたのであった。原録音が飛び抜けた特性だったから、いまや高度な技術が集約されたスーパーオーディオ：ＳＡＣＤにリ・マスタリングされ、２００４年に発売されたというのが経緯である。

聴いてみると、老モントゥーが心血を注(そそ)いだ緻密な名演奏は漏れなく再現される、その音質の秀逸さにも驚かされる。ディジタル化技術こそ凄まじいほど高度化されたのに、アナログでしか出来ない収音技術による音響のソノリティ、プレゼンス、ダイナミックレンジ、Ｓ／Ｎ比、周波数特性などについては、現代の録音技師たちが束になって逆立ちしても敵(かな)わないほど。ドイツのノイマン製マイクロフォンの高性能も見捨て難い。結果、音の出口であるスピーカーにも言えることではあるが、アナログ録音再生技術は６０年経っても一向に発達していないのだ。これは、『無用の用』ともいえる空間を満たす音場の音響工学を軽視したか、難を避けたのか、より安易なディジタル信号処理技術に偏(かたよ)って育ってきた日本のエンジニアが余りにも多いということであろう。それとも、アナログ音響工学は１９５０年代がピークであったのかもしれない。

これからは、温故知新として、いかほどの音響技術者が過去に向かうか、である。しかしな

がら、東京文化会館大ホール、ウィーン・ソフィエンザールやミラノ・スカラ座、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールなど、世界の著名な音楽堂におけるライブ演奏を百回以上も聴きこなして、まず、己の聴覚に音場という物理的概念を焼き付けねばならない。ヨーロッパでは、主要都市や地方の町隅々まで広く、総じて演奏会の機会が日本の十倍以上もあるから、ヤングたちは恵まれている。日本人は、そういう面で可哀そうだ。

交響曲第６番 Op. 74 “悲愴”

https://tower.jp/item/image/list/911597?imgIdx=0

この第６番の楽章構成は次のとおりであるが、やはり、第１楽章以外、とりたてて感激する楽章はない。それでも、第３楽章の行進曲風は、威風堂々として激しく前進するエネルギーは聴きごたえ十分であるが、何故か、第４楽章の唐突な暗さに結びつかない。いや、第４楽章にロマンが無いと言った方がよいかもしれない。分裂症的なマーラーのように聴こえる。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロッポ(ロ短調)～アンダンテ (二長調-ロ長調)

コントラバスの上にファゴットが乗ったドッシリとした序奏で作品は始まる。

この第1主題がヴィオラとチェロに引き継がれ、管楽器と弦楽器が主題を渡しあう。

テンポがアレグロに変わったところで弦楽器が印象的なリズムをメロディにのせて奏で、やがて音楽は激しさをす。

そして音楽が落ちついたところで、弦楽器が第2主題を演奏。この美しい第2主題は、多くの音楽ファンがうっとりとするシーンである。

ほとんど聴こえないほど弱音になった後に、展開部は突然のフォルティシモで始まり、激しく情熱的な音楽が演奏される。第1主題を中心とし、さらに第2主題も加わって、音圧が次第に高まっていく。静寂を挟んだ後に音楽は再び盛り上がり、音楽は一度クライマックスを迎えトロンボーンが激しく鳴る。

そして最後は穏やかな音楽の中で第1楽章は終わります。

第2楽章 アレグロ・コン・グラジア(二長調−ロ短調−二長調)

2拍+3拍で構成されるロシア風の5拍子のワルツが流れる。舞曲ではありますが「悲愴」のタイトルが感じられるような、悲しげな印象。

ロ短調に移調してからは音楽はさらに重たくなり、重たい音楽が流れる。

主部が再現された後に、最後は消えてなくなるように第2楽章は終わる。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ (ト長調−ホ長調−ト長調)

第6番 （悲愴）は全体を通して暗い雰囲気に覆われているが、この第3楽章はきらびやかな行進曲のような雰囲気に包まれてる。章の終わりも1.2.4楽章が静かに終わる中、第3楽章だけがクライマックスの中で盛大に終わりを迎える。

音楽はスケルツォと行進曲からできている。

第4楽章 アダージョ・ラメント―ソ(ロ短調)～アンダンテ (二長調)

悲しみに満ちたヴァイオリンの主題ではじまり、この主題は第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが交互に演奏。この主題が繰り返され、悲壮感がさらに加わる盛り上がりをみせ、テンポはアンダンテへと変わる。

クライマックスが激しく劇的に演奏された後に、重苦しい雰囲気の中で消えるように作品全体は幕を降ろす。

参考: https://tsvocalschool.com/classic/tchaikovsky-74/#i-2

飛 天

参考までに、第１楽章第２節について私なりのイメージである実際の伝説「艶(なま)めかしい飛天」について掲げる。次の写真のように、薬師寺三重塔における天辺に「水煙」という避雷針が置かれている。そこに、仏教でいう『飛天』が彫られているのである。

薬師寺東塔

https://blogs.yahoo.co.jp/kassy1946/GALLERY/show_image.html?id=62475025&no=9

薬師寺東塔の水煙（新）

https://nara-jisya.info/2019/01/07/国宝東塔-新旧水煙特別公開/

薬師寺東塔の水煙。水煙とは、塔の相輪上部に付けられる火焔形の装飾物で、塔を雷や火災から守る水をイメージしたものだ。薬師寺東塔の水煙は芸術的にも素晴らしいもので、和辻哲郎は「古寺巡礼」の中でこう書いている。

わたくしたちは金堂と東院堂との間の草原に立って、双眼鏡でこの塔の相輪を見上げた。塔の高さと実によく釣合ったこの相輪の頂上には、美しい水煙が、塔全体の調和をここに集めたかのように、かろやかに、しかも千鈞の重味をもって掛っている。その水煙に透し彫られている天人がまた言語に絶して美しい。真逆様に身を翻した半裸の女体の、微妙なふくよかな肉づけ、美しい柔かなうねり方。その円々とした、しかも細やかな腰や大腿にまとう薄い衣の、柔艶を極めたなびき方。──しかしそれは双眼鏡を以てしても幽かにしか解らない高いところに掛っている。だから詳しい観察を求めるものはどうしても塔の一階に置かれた石膏の模作に引きつけられざるを得ない。模作で眺めても、天人の体が水煙と融け合った微妙な装飾文様は、これほどのことまでわれわれの祖先には出来たのかと思うほど美しい。

http://holoholo.air-nifty.com/nara/2004/07/post_14.html

薬師寺西塔（1981年新築）の水煙

https://ameblo.jp/tetsudotabi/entry-12443837039.html

最 後

１８９３年はピョートル最後の年、それは栄光の年ともいえるが複雑な様相を呈している。６月12日はイギリスのケンブリッジ大学で幻想曲「フランチェスカ･ダ･リミニ Op. 32」（1876年作曲）を指揮し、名誉博士号を授与される。

そして、甥ダヴィドフに献呈した交響曲第６番は、音楽の点においても彼の死の問題からも重要かつ興味深い作品となったと言われているが。実は、作曲後に、次の第７番の構想を練っていたようだから、この第６番はピョートルの「白鳥の歌」と呼ぶことは相応(ふさわ)しくない。10月16日サンクトペテルブルクでピョートル自身の指揮で初演し、大成功を収めた。その９日後の10月25日（西暦11月６日）午前３時、サンクトペテルブルクの弟モデストの家で死去した。ピョートルの死因説はまだ現在も100%確定できていないが、次の二つの説があるようだ。

① コレラ説：弟モデストの主張＝10月20日に夕食をレストラン食べ、腹具合を悪くし、さらに21日昼食に生水を飲んでコレラを発症したとしている。

妹アレクサンドリアの末子ユーリイ･ダヴィドフに「交響曲第６番Op. 74“悲愴”」が献呈されたが、ダヴィドフは毒殺あるいは自殺説を主張している。

② 名誉による自殺説：ロシア（旧ソ連）の音楽学者アレクサンドラ･オルロヴァの主張＝彼女は1966年にサンクトペテルブルク（旧レニングラード）のロシア博物館のアレクサンドル･ヴォイトフから次の話を聞き取った。

それはロシアのある貴族が所持する、その彼の甥と性的マイノリティであるピョートルの関係を記した手紙を、皇帝へ直訴するために高い地位の官吏ニコライ･ヤコビに託した。ヤコビはピョートルと同じ法律学校――法律のキャリアを育てる名門であった――の出身であった。彼は学校の名誉が汚されることを恐れ、ピョートルの同窓生６人をも含む組織が組まれ、話し合いが密かにもたれた。10月19日ピョートルがこの話し合いに呼ばれ、５時間に及ぶ議論の結果、ピョートルに名誉の自殺を求める決定を言い渡した。ピョートルは震えながら部屋から飛び出し、その２日後、弟モデストの家で彼は抑圧状態で、話し合いで与えられた砒素系の毒によって死に至った。こうした発表をアレクサンドラ･オルロヴァは1978年に真相を調査した論文発表を行った。

参考： http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html チャイコフスキーの生涯

いろいろな憶測が飛び交うほど、ピョートルの死は、世間を驚愕させた。されど、私たちにはどうでもよい。東洋的宗教観によれば、天命なのである。ピョートルの傑作だらけの遺産だ

けで充分である。

それ以上に何を望むのか？　彼の１００曲以上の名作をことごとく味わってから、それぞれ好きな詮索をやってほしい。余り聴いてないのに、彼の死因を云々することは止めて欲しい。

それから、

ピョートル・チャイコフスキーは、同性愛者だったという噂を書く評論家が無視できないほどいる。ピョートルの生涯をたどって語っているのだが、私は信用しない。評論家たちに言いたい。ピョートルの足跡を調査した以上に彼の作品をくまなく聴いてきたのかと。

問題は、彼の音楽である。性に倒錯し、あるいはＬＧＢＴ*のごとく真っ当な性を諦めたのか知らないが、仮にピョートルがそうだったとしたら、世界中の常識的な一般聴衆を惹きつけて止まないほどの**美しい名曲**を創作できただろうか。

［註］LGBTとは、Lesbian（レズビアン、女性同性愛者）、Gay（ゲイ、男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル、両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー、性別越境者）の頭文字をとった単語で、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）の総称のひとつ

異常な感性を持った人が創れるはずもない。百歩譲って評論家らが並べているいくつかの状況証拠を認めたとしても、事実は誰も確認していない。

このような不埒な文筆家が少なくないことは、誠に嘆かわしい。そういう彼らのうちで一人でも同性愛者なら話は別で、該当者は、少なくとも自ら「私は同性愛者である」と言明したうえで批評するべきである。そういう人こそ、できそうもないし、人々の心に染入るピョートル哀愁には、シロアリのように、檜ともいうべき彼の音楽に近づくことも咀嚼することもできない。こういった聞きたくもない話、心無い噂は、念のため最後に、ここで消しておく。

エピローグ

ピョートル・チャイコフスキーは、私たちクラシック・ファンにとっては、蓋し、

ホワイト・ナイト（白馬の騎士）

というべきであろう。ホワイト・ナイトという架空の人物名称は、ディズニーの「白雪姫」で著名になり、その主題歌はジャズのスタンダード《いつか王子様が》として世界中で数え切れないほど演奏されてきている。つい先ごろは、真山仁の小説「ハゲタカ」においても救いの神としてその代名詞が轟いた。そんなふうに広く応用されてきている。ピョートルの傑作に触れたために「やっとクラシックに夢中になれる」とか「耳から鱗が落ちた」と感銘した人が大勢いる。肩ぐるしいクラシックにあぐねてきた想いから開放してくれた。そういった意味で《白馬の騎士》といえるのではないか。そういう私にとっても、ピョートルは想い出深いホワイト・ナイトだった。

一方、３Ｂの大作曲家たちと対比すると、彼らでは表せなかった哀愁と華麗が奏でられ、悲鳴をあげるほどの歓びを私たちに浴びせて、ピョートルは私たちをクラシックの虜にしてきた。だから、彼こそはロシアの誇りでもあり、ラフマニノフではなく、やはり、チャイコフスキー・コンクールという豪華な国際ミュージシャン・コンテストを構えて讃えてきた。

ピョートルの音楽は、一言でいうならクレムリン宮殿を凌駕するほど「壮麗」である。そして、彼のオーケストレーションこそは、まさに１９世紀末の偉大な到達点であろう。同時期のドイツ・ロマン派のブラームスはじめ、気付かなかったエヴォリューション＝進化の領域でもある。

おそらく、ベートーヴェンに触発されたベルリオーズやワーグナー、それからブルックナーという恐るべき作曲家たちが手にした極彩色の油絵の管弦楽法に並ぶものとも言える。イタリア歌劇では、ヴェルディとプッチーニになろう。ピョートルは旅行が好きだったから、ヨーロッパ中を周ってライバルたちの演奏会やオペラなどのライブを直に堪能した。そして、いつの間にか管弦楽における「管楽器の活用」に着目したものと想像できる。その吸収力の豊かさに始まり、美麗極まる音に表現してしまう魔力には、バチカンにおけるあのシスティーナ礼拝堂の天井画を描いたミケランジェロのような豪絶な彩色パワーが感じられる。

故に、彼の感力は天性のものなのであろう。不思議に、そこを掘り下げた評論は見たことがない。天性と言うことは安易すぎる。どうにも分析できない人の資質をそう簡単に言い切ることは、あまり誉められたことではない。

たぶん、発端は、当時の**オルケストリオン**という玩具のような自動演奏器械をプレゼントされてから、彼の脳裏に管弦楽音響への強い関心が芽生えたのであろう。最先端の医学では、ＤＮＡの管弦楽に係る部分にスイッチが入ったのだと言うかもしれない。歴史的には、それまで法律を学んできた彼が２２歳の時にペテルブルグ音楽院が創立され、その第一期生として音楽理論など吸収して、埋(うず)もれていた作曲嗜好が孟宗竹(もうそうちく)のタケノコのように、縁側を突き抜けるほど成長してしまった。

一般的に、青少年期の印象は明瞭な記憶として刻まれ、いまでいうＲＯＭ：Read Only Memoryのごとく、一生消えることはない。凡人ならそれで終わるが、ピョートルは芸術家としての創作力でもって、記憶という印象を楽曲に反映して膨大な傑作を世に残した。いまや、世界中の音楽家と聴衆に幸福を雨あられのように降り注(そそ)いでいる。

だが、ピョートルの音楽においては、喜怒哀楽のうち「哀しみの怒り」が余りない。ベートーヴェンやブラームスのように、炸裂する「魂の叫び」をあげたものが、私には見つからない。これは望みすぎ。彼の壮麗な音楽に鼓舞されて、陶酔してきた私としても、そこまでは批評する気はないが、彼のプロファイルとして掲げた次第である。王侯貴族を始めとする小難(こむずか)しい知識階級が好む雅(みやび)に満ちた楽曲を創ったことは、モーツァルトに傾倒した所以(ゆえん)かもしれない。

結果として、当時の貴族や一般聴衆を沸かせたのだから、彼の人生は「哀しみの怒り」に没しないほど、幸せだったにちがいない。

さて、チャイコフスキーをもって第１段階の「クラシック巡礼」は、ひと区切りとなる。田中陽希の百名山グレート・トラバースのようにもなるが、何というか巨峰ばかりで足腰の疲れはだいぶ溜まってきている。独りの人間がたどれる道程ではない。このため、迂回したり、近道を急いだり、ヒッチハイクしたこともあった。特に、巨大なベートーヴェンでは交響曲をすべてカットしてしまったことは、心残りでもある。バッハのマタイ受難曲も然(しか)り。これら二つの名峰登頂の再挑戦も頭から消えてくれないが、欲張りは怪我の元であるから、私のペースを守りながらガラパゴスのゾウガメのようにゆるりと巡っていきたい。

これからの第２段階巡礼は、オーケストレーションに拘(こだわ)っていくつもりである。その一番手こそベルリオーズ（1803-1869）になろう。少し時代を遡(さかのぼ)るが、ベートーヴェンを愛した彼を跳ばしては、ベートーヴェンに窘(たしな)められそうでもあるから。

＜参考図書等＞

No.	題名	著者	発行元
1	チャイコフスキー	伊藤恵子	音楽之友社
2	チャイコフスキイ	森田　稔	新潮社
3	チャイコフスキー物語	園部四郎	岩波新書
4	チャイコフスキー 「わが愛」	バランシン／ヴォルコフ 訳：斉藤　毅	新書館

5　花の絵「チャイコフスキー交響曲第4番」
http://www.hananoe.jp/classical/gakunomori/gakunomori052.html

6　チャイコフスキーの生涯
http://pietro.music.coocan.jp/storia/tchaikovsky_vita.html